
神様の凡ミスで転生した男～バラ色？灰色？人生再スタート！～

自分不器用ですから

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の凡ミスで転生した男〰️バラ色？灰色？人生再スタート！〰️

【Nコード】

N8782W

【作者名】

自分不器用ですから

【あらすじ】

神様のある凡ミスによつて死んでしまった主人公。そんな彼を憐れんだ神様は彼にスタボロにされながらもどうにか彼を転生させるという。そんな彼が選んだのはアニメの世界を旅するというものだった。そして彼は新しい名前を手に入れた。その名は「カムイ」。彼は新たな存在としてもう一度、人生の再スタートを図る！はたしてどんな生活が待っているのか？

1 転生者と魔導器と喫茶店

基本的に前の事はあまり覚えていない。というより名前も思い出せない。

とりあえずは事故ったのは覚えてる。そんなもって意識が飛んで真っ暗になった。

そして次に目を開けたら目の前にいたのは髭面のおっさん。基、自称、神様らしい。

なんで俺がこんなところに、しかも神様の前にいるんだと問いかけて返答がこうだ。

「神様」

「いや」・君の人生書を書き足していたら間違っで飲んでいた珈琲をこぼしてしまっ

てね。慌てて拭いたら破れてしまっで君に死亡が下ってしまったんだ、はははっ」

まあ、あれだな。テレビだところなる。【放送事故によりしばらくお待ちください】

「神様」

「き」・君、神に向けてエルボースマッシュがますとはやるものだね・・・」

いやなんならこのまま仕留めてやってもいいんだぞ？今なら神でも

倒せそうだし、俺。

＋神様＋

「わ・・分かった、君をもう一度、生き返らせよう。なんなら別の世界や人物に転生

させても構わん。今回はわたしが許可しよう、好きな事をいつてみなさい」

いきなりそう言われても困る。何でも好きな状態に転生させてくれるらしい。散々ぱら考えた俺が辿り着いたのはまた平凡で退屈な生活というのも飽きてしまう。

どうせなら刺激のある生活つてのもしてみたい・・・そして至った答えがこうだった。

＋神様＋

「何？ヒーローみたいなキャラでアニメの中を旅したいだつて？ほほう君も男の子だな

、男たるもの旅の1つや2つせねば、わしの若い頃など・・・」

つつか、こいつは本当に神なのか？こんなやつが神様やってるから今の日本経済だとか

政治不信になつてんじゃねえの？・・・関係ねえか、ここまでは。

＋神様＋

「んでどんなモノが君は好きなのかね？」

ん？何がいいもんかな、俺が好きなのは・・・あれだな。

＋神様＋

「テイルズとかがに好きじゃと?というよりその歳でまだ剣や魔法などが好き――」

【nice boat】しばらくお待ちください。

十神様十

「分かった・・・その願いは受理し・・・よ・・・う」

本当にここで神の一生、終わらしてやろうか?つつか男なんてもんはずっとそういうヒ

ーローってのには懂れるんだよ、子供の頃は本当にヒーローになりたかったしな。

十神様十

「それではどれ・・・マンマンテロテロ・・・」

つつか、あんたこそそれ魔法先生ネギま!のナギの詠唱キーじゃねえかよ。

十神様十

「いや・・・最近、結構気になっていてね。はっはっはっは」

・・・本当にこいつが神で大丈夫か?いや、俺もネギま!は読める方だけどさ。

十神様十

「ほい!」

その声と共に俺の手には金色の腕輪が装備される。ってこれ確かテイルズオブヴェス

ペリアで主人公のユーリが付けてる魔導器ブラスティアじゃねえか。

十神様十

「それが君の変身アイテムじゃよ。モデルがなかったので適当なモノをデザインに選

ばせてもらったがそれによつて色々な職業になる事ができるぞい？」

マジか！やべえ、テンションが上がってきたぞ。

十神様十

「はっはっは！喜んでくれて何よりじゃよ！それではまず最初の世界に行くとするかの」

十?????十

「てかまずはどの世界に行くんだ？」

十神様十

「さすがにそれは分からんの……行く世界は完全にランダムじやし、まあ君が行つ

て世界の情報をこちらに転送してくればいつでも行ける様に出来るから行つて楽し

んでまた別の世界に行くという風にすればよいじゃろつな」

まあ、なかなか面白そうな事になってきたな。退屈せずにすむかもしれない。案外、こ

れはこれで良かったかもな、家に行つても親もいないしさ。

俺の親なんざ、金を苦に育てられない俺を孤児院に預けてまた戻つてくるとか言つてた

が結局は高校生となつていた今にいたるまで一度も顔を見せる事は

なかった。

名前も覚えてないってのに何故か、それだけはイライラするが覚えてしまっていた。

＋神様＋

「あれじゃな、君の名前も消えてしまったからな。新しい名が必要じゃろ、うゝむ」

神様が少し顎に手を添えながら思索し始める。このおっさんだとちよつと心配なんだが。

＋神様＋

「君は転生者となるわけだしある意味の霊的存在という意味でカムイはどうかね？」

＋カムイ＋

「んまあゝ・・・あんたにしたら随分とまともな名前だな、あんがとさん」

＋神様＋

「ちなみに各世界にいったらその世界での設定を書いた紙が送られるからそれを見て

自己判断しておくれ。あと転生しても死んじやうから気をつけてのゝ」

うん、何だか恐ろしい事を軽い口調で言われたな。まあ・・・腕には自信はある。

＋神様＋

「そいじゃ早速、いってみようかのうゝゝ！ゲートオープンじゃ！」

刹那、何故か、ふわりと浮く感覚と共におっさんが上にフェードアウトしていく。

＋カムイ＋

「へ？・・・ぎゃあああああああああああああああ！
！！！！？」

俺がフェードアウトかーーーーーい！！？そしてまた目の前が真っ暗になった。

・ ・ ・ ・

＋？？？？＋

「カムイお兄ちゃん、起きてよ？カムイお兄ちゃん！」

＋カムイ＋

「んあ？」

目覚めた時に見えてきたのは何とも見慣れない街並み。いや・・・見た事はある気がする。

＋カムイ＋

「俺は・・・？そういえばおっさんに転生してもらって・・・穴に落ちて・・・」

＋？？？？＋

「何言ってるの？カムイお兄ちゃん？」

俺はやつと声の主に気付いてその方を向いたのだが背が低い女の子が立っていた。

んっ・・・？この子って・・・どこかで見た事があるような・・・。

＋？？？？＋

「早くしないと店の開店時間だよ？折角、お手伝いに来たのに」

どうにか思考が廻り始めた俺はポケットに一枚の髪が入っている事に気づいて取り出す。

＋カムイ＋

「（これって・・・神のおっさんが言ってた俺のこの世界での設定か？）」

設定・1 世界は「魔法少女リリカルなのはVivid」。年齢は20歳。

設定・2 君は喫茶店の若いマスター。登場人物たちがよく利用している。

設定・3 技は自動的に魔導器にセーブされ記憶として脳内に記録される。魔導器によ

って各職業に変身する。もっとも高いレベルなのは『剣士』。

そうか、この子はどっかで見たよなと思ったらリリカルなのはに出てくるヴィヴィオだ。

つつか・・・あれだな、アニメでもそうだったけど直に見ると破壊力あるぞ、これ？

設定・4 機動六課メンバーとの戦闘も卒なくこなす程度の実力。

いや、あいつらとの戦闘をそつなくこなせれば十分な気もする、うん。

設定・5 テイルズキャラもこの世界の住人として登場する。

設定・6 物語としてはテイルズ系のボス達が現れるのでそれを倒して平和にする事。

設定・7 その後の状況は自分で好きに行動しなさい。行動により未来は変化する。

設定・8 新たな世界を発見した際は連絡がいくのでよろしくby 神様

＋カムイ＋

「（初めてでも頭に記憶が追加されんだな。仕事の仕方とか思い出してきたな）」

＋ヴィヴィオ＋

「カムイお兄ちゃん？」

＋カムイ＋

「おつと悪い、悪い。それじゃ今日も手伝い頼むよ、ヴィヴィオ」

＋ヴィヴィオ＋

「はい！」

striker'sのヴィヴィオもそりゃ可愛いけどこうやって成長しても可愛いな。

何だかこれはこれで得した気分だな、いや、俺は決してロリコンと

かじゃないからな？

只単にアニメで見ていたキャラと話せるってのが楽しくなってきた
だけだぞ？無論だ。

† ヴィヴィオ †

「着替え終わったよ〜！」

一応はこの喫茶店の制服を着てきたヴィヴィオが目の前でくるりと
一回転してみせた。

† カムイ †

「うん、いつものように可愛いぞ、ヴィヴィオ？」

† ヴィヴィオ †

「へへっ〜♪ ありがとう」

そんな中、店のドアが開いて人が入ってくる。

ピンク色の髪を後ろでまとめている少女・確か前のリリカルなのは
で主人公達の敵とし

て登場したナンバーズの1人でウェンディ、どうやらこの店のバイ
トの設定らしい。

† ウェンディ †

「おはようッス〜！」

† カムイ †

「おはようさん、ウェンディ」

† ヴィヴィオ †

「おはよう〜！」

こうしてウエンディも制服に着替えていつも通りという脳内記憶の元、店を開店させた。

記憶では結構、客足も多く、それなりに繁盛はしている喫茶店設定らしい。

しかもこの店の名前も当て付けと言えば当て付けだが『喫茶店・vivid』である。

＋カムイ＋

「いらつしやいませ」

＋ヴィヴィオ・ウエンディ＋

「いらつしやいませ」

早速、お客さんか・・・などと仕事をしていた俺だがそれからかなりテンションが上がった。

＋カムイ＋

「（うおっ・・・ヴォルケンリッター勢揃いかよ。つかヴィータたちせえ・・・）」

＋ヴィータ＋

「んっ？何かお前、さっきよからぬ事考えてねえだろうな？」

＋カムイ＋

「イヤ、カンガエテマセンヨ。ヤダナー、ハッハッハッハ」

＋ヴィータ＋

「てめえ・・・何で片言になってやがる！！正直に言え！！！！！！」

漫画版とかアニメでもそうだけど身長にはかなりコンプレックスあるのね・・・。

†シグナム†

「それにしてもお前ほどの技量を持ちながら喫茶店のマスターとはもったいないものだな」

その中の1人で知らない人はいないリリカルなのはの主要キャラ・シグナムが口を開く。

†カムイ†

「買ってくれるのはいいけど俺はしがないマスターだよ。過剰評価はやめてくれ」

前の性格からだがあまり褒められるのが得意ではない。褒められ下手とよく言われた。

†ヴィータ†

「シグナムとも普通に剣の模擬戦やっていい運動だったとか抜かせるのお前だけだぞ」

†カムイ†

「（あゝ・・・記憶蘇ったけど・・・マジでこれは俺がやったのかよ・・・おい）」

我が記憶ながらかなり恐ろしい事になっていた。つうか紅蓮の悪魔じゃん、シグナム。

†カムイ†

「はい、特製生クリームのせプティング出来たぞ。あと抹茶アイス

3つ」

「ウエンディ」

「了解ッス〜！」

ウエンディがシグナム達の注文メニューを持っていく。ヴィヴィオはというと外で客引

きをやってもらっている。ここが繁盛しているのもヴィヴィオのおかげだったりした。

やっぱり可愛らしさというのはどうしても凶悪な兵器になり得るものだ。

「ヴィータ」

「美味〜い！このクリームがどこの店より絶品だな」

何気にヴィータはプリンが好きなようで毎度、注文している。うちの店は喫茶店ではあるのだが店のメニューは和洋に中華、何でもありな店だった。

「?????・?????・?????」

「「「こんにちわ」」」」

「カムイ」

「（おっ！今度はテイルズキャラの登場か！）」

そつえば設定のところにテイルズキャラも住人として登場するってあったっけな。

入ってきたのはマイソロのパスカ・カノンノ、マイソロ2のカノンノ・イアハートにマ

イソロ3のカノンノ・グラスバレー・・・って3姉妹設定なのね。

＋カムイ＋

「ご注文は？」

＋パスカ・イアハート・グラスバレー＋

「「「焼きりんご！」」」

やっぱり好物も3人、同じなのね。ここら辺は原作ネタ同様ってやつだな。

下ごしらえを済ませてある焼きりんごのりんごをオーブンに入れて焼き上げていく。

＋ヴィヴィオ＋

「お客さん、2名様、はいりまーす！」

どうやらヴィヴィオがお客さんをつかまえたらしい。

＋?????＋

「よー！来たぜー！」

＋?????＋

「カムイ、味噌焼き頼むー！」

＋カムイ＋

「でたな、シスコン共」

ファンタジアのチェスター・バークライトにハーツのヒスイ・ハーツがやってきた。

＋チェスター・ヒスイ＋

「誰がシスコンだ！？ゴラアアアアアア！！？」

＋カムイ＋

「その歳になっても妹離れ出来ない時点でシスコンだろうが。多数決とつたろうか？」

2人がシスコンだと思う人。

＋一同＋

「ん」「はい」「うむ」「だな」「ツスね」「」「す・すいません」「」

＋ヴィヴィオ＋

「シスコンって何？カムイお兄ちゃん？」

どうやらヴィヴィオは用語についての知識がないらしい。いや、知らなくていい。

＋カムイ＋

「ヴィヴィオは別に覚えなくていいとき、それよりまた客引き頼むな？」

＋ヴィヴィオ＋

「はい」

そしてヒスイに頼まれたアスパラの味噌焼きとチエスターにはマールボーカレーを出した。

＋ヒスイ＋

「うめえ！やっぱここの味噌はいい味だなー！コハクに土産頼むぜ」

＋チエスター＋

「俺もこの麻婆豆腐をアミィに土産で頼む」

＋カムイ＋

「あいよ」

あれだな、こりや結構忙しいぞ？でも作った料理をこう言って貰えるのってなんだか

いいもんだな・・・前の人生じゃ1人寂しい食事ばつかったし・・・
・幸せって奴？

だがそんな中、いきなり窓ガラスをブチ破って何者かが侵入してくる。

＋カムイ＋

「（ああ、記憶蘇った。あの精神崩壊野郎か。しつこいもんだな）」

ヴェスペリアで主人公ストーカーとして有名な奴が現れたようだ。

＋?????＋

「カムイイイ！！俺と戦え！俺をもつと上がらせろおおお！！」

ヴェスペリアのボスキャラの1人でザギがゲーム同様のキャラで暴れ出した。こいつ

は俺をこの土地から立ち退きをさせようとしている暴力団支部の1人らしいな。

＋カムイ＋

「ちっ！人の店で暴れやがって・・・！俺の店で騒ぎ起こすのは

「ご法度だ!!」

そして腕の魔導器に手を触れると俺の服装が変わっていく。
黒を基調としたロングコートに茶色のハイウエストベルト、白で各所に装飾が施されている。

マジでこんな風に変身出来んだな、ってこれで感動してる場合じゃないな!

「カムイ」

「さっさと退場しろ!瞬迅剣!」

鋭い踏み込みから強烈な突きでザギを窓からまた外にたたき出す。

「ザギ」

「いいぜえ!カムイ!俺と殺し合いといこうじゃないか!」

双剣を扱ってくるザギの攻撃を盾と剣で防ぎながら一旦、距離を取る。

「ザギ」

「空破特攻!!」

身体全身を回転させながら突撃してくるザギの攻撃を盾で流しながら真下を回避する。

「ザギ」

「何!?!」

「カムイ」

「甘いんだよ!蒼破刃!蒼破追連!魔神連牙斬!ぶっ飛べ!」

蒼い波動を放つてさらに2連から魔神剣の4連打でザギの動きを止めて手に闘気を込める。

＋カムイ＋

「獅子戦吼！追撃戦吼！」
ししせんこう ついげせんこう

＋ザギ＋

「なに！？ごはっあ？！」

盾による獅子の気を込めた一撃からさらにもう一撃叩き込んで吹っ飛ばした。
さっさと決めにかかろうとして駆け出そうとしたが突如声が飛び込んでくる。

＋????＋

「おおっと！！そこまでだぞ、小僧！」

＋カムイ＋

「なっ！ヴィヴィオ！」

＋ヴィヴィオ＋

「カムイお兄ちゃん……」

振り返った視線の先には支部の1人でかなり真ん丸の身体だが大剣と手にはフックを
装備している柄の悪い男がヴィヴィオをつかまえて喉元に剣を突きつけた。

＋ウエンディ＋

「ヴィヴィオ！お前、卑怯ツスよ！！」

ヴィヴィオを人質に取られた機動六課の面々も動けない。

＋バルボス＋

「うるせえ！さっさとめえらがでいかなからだろうがさあ、大人しく武器捨てろ」

ヴィヴィオもさしで戦えばバルボスも倒せるだろうが首元に刃を突きつけられては

さすがに下手に行動がとれなくなってしまふ。

そして俺も人質をとられてしまい、攻撃をやめて剣を放り投げた。

＋バルボス＋

「へっへへ・・・さあゝてたつぷりと可愛がつてやるぜ？お嬢ちゃん含めてな」

だがここで俺も想像していなかった援軍が現れる事になった。

＋?????＋

「ダオスコレーザー！！」

極太の閃光がバルボスの背中に直撃してそのまま吹き飛び、ヴィヴィオも宙を舞う。

＋カムイ＋

「ヴィヴィオ！」

俺がすぐにキャッチして確認するがどうやら無事なようだ。

＋カムイ＋

「っていうか、お前、ダオス！？なんで各ゲームで隠しボスになってるお前が??」

目の前にいるのはテイルズオブファンジア、さらには各作品では隠しボスとしても有名

になっている『時を駆ける男』・魔王とすら呼ばれるダオスだった。

＋ダオス＋

「その少女には借りがある。以前、傷ついたわたしに飴玉をくれた・

・あの時、この世

界の人間もまだ捨てたものではないと思ってな・・・故に」

そういつてバルボスを持ち上げてそのまま睨みつける。作品での弱い中ボスとラスボス

中のラスボスとっていい実力差、すでに勝負見えてるじゃねえか・・・。

つかこいつもヴィヴィオの可愛さに取り込まれたシスコ・・・いや、ダオスは合わないな。

＋ダオス＋

「危害を加える愚者には鉄槌を下す！！テトラアサルト！！」

凄まじい速度の体術の連携でバルボスをフルボッコにした後、トドメの一撃を放つ。

＋ダオス＋

「ダオスコレダー！」

拳を地面に叩き付けると同時に半円状の波動が放出されてバルボス

は天へブツ飛ばされた。

「ヴィヴィオ」

「ありがとう」ダオスさん！」

「ダオス」

「・・・礼には及ばぬ・・・（照）」

「カムイ」

「（あのダオスが頬を赤らめて照れてる・・・だっ！？）」

普段のゲームだと冷酷なボスが小学4年生の少女にお礼言われて照れるよ、おい（驚

「ザギ」

「カムイイイイイイイ！！！！」

そして性懲りもなく斬り掛かってきたザギの一撃を盾で防いだが剣を捨ててしまった

ので武器がないのだがここで俺は神様の声を思い出した。

この魔導器にはまだ他の職業も記憶されている・・・こんな時、役立つ職業は・・・。

「カムイ」

「レディアント　メア　グラップラー！」

それと同時に俺の身体がまた光り輝いて黒のコート姿から金色に朱色で刺繍を施した

さつきとは違って煌びやかなショートジャケットに腰当てと白のズボンに黒のブーツと

そのまま地面に叩き込まれ、それでも衝撃が抑えられずに地面を転がりながらそのまま街の河川に堕ちてどこかに流されていく、ザギ。二度と出てくんな！

こうして一息ついて俺の姿が元のマスター服に戻って周りからは声援が飛んだ。

「ヴィータ」

「へっ、案外、体術もやれんじゃねえか。剣だけかと思ってたんだけどよー！」

「シグナム」

「ふふっ・・・これで楽しみがまた増えたな・・・」

いや、なんの楽しみですか、シグナムさん？

「ザフィーラ」

「見事な一撃だったな、あれをくらってただで済むものはいないだろう」

やっと初台詞なザフィーラ。でも記憶だと結構、いい勝負してるんだよな、俺とこいつ。

「シャマル」

「あつ、そうだ。ヴィヴィオは怪我はないんですか？」

おつとそうだった。ヴィヴィオの奴、見た感じはなかったけど大丈夫なんだろうな？

「ヴィヴィオ」

「うん、ダオスさんが治癒術？かけてくれたからさっきより元気になったよ！」

†チエスター†

「ていうか・・あの野郎が味方するなんてな・・・ヴィヴィオの奴、ある意味凄えぞ」

そりゃそうだよな、チエスターの場合はダオスって宿敵なわけだし、そんな魔王って

言われてる奴がヴィヴィオを助けに現れてお礼言われて頬を赤らめてたんだからな。

確かにヴィヴィオって・・・最強じゃね？

†ヴィヴィオ†

「あつ、そうだ。お兄ちゃん、お兄ちゃん」

†カムイ†

「んっ？なんだ、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオに手招きされて近寄ると腕に思いっきり抱き着いて身体を引かれる。

†ヴィヴィオ†

「ありがと♪（ちゅっ）」

・・・・へっ？

†イアハート・パスカ・グラスバレー†

「「「きゃーーーーー♪ひゅー♪ひゅー♪なんかドキドキしちゃっ

」
」
」

いや、お前ら、そんなにシンクロする必要ねえだろ・・・ってそうじゃない！

＋チエスター・ヒスイ＋

「てめえはロリコンじゃねえか！！！」

断じて違う！

＋カムイ＋

「な・・・何すんだ、ヴィヴィオ！？」

キスされた？ヴィヴィオに？いや小学生なんだからスキンシップの1つ程度で考えればいいのだがこんな事されたこともないので顔が真っ赤になる。

＋ヴィヴィオ＋

「助けてくれたお礼♪カッコよかったよ、カムイお兄ちゃん♪」

なんだ？なんだ？なんですかああああ！！？何、この幸セイベント！ありえへんで！？

いや何、俺はテンション壊れてんだ、落ち着け・・・！危ない、もう少しでキャラが（汗

でもあれだよな・・・誰かを護って『ありがとう』って言われるのってなんだかヒーロ

ーっぽくてそれにお礼言われると何だか素直に嬉しくなる・・・変な感じだ。

＋カムイ＋

「ありがとな、ヴィヴィオ？」

＋ヴィヴィオ＋

「うん」

＋ウエンディ＋

「これで一軒落着ツスね！」

＋?????＋

「・・・思っていたのか？」

とどこぞの伝説のスーパーサ○ヤ人的な言葉が聞こえて辺りを見るとヴォルケンリツターやカノンノ達、テイルズ勢がかなりひきつった顔をしている。

＋カムイ＋

「な・・・なんなん・・・えっ？」

そこに立っていたのはリリカルなのはの主人公にして管理局の白い悪魔、そしてこのヴィヴィオの母親の『高町 なのは』が何故かレイジングハートを構えていた。

そして横には怯えた様子の彼女の元教え子の『スバル・ナカジマ』に『ティアナ・ラ

ンスター』もいる・・・ってそんな呑気に状況を言ってる場合じゃない。

＋カムイ＋

「あの・・・なのは？一体、何をそんなにご機嫌なオーラだしてるんだ？」

「なのは」

「まったく人の娘のファーストキスを奪っておいて何いつてるのかな？カムイは？」

あれですか？親馬鹿な父親によからぬシーンを見つけた的なオチですか？

「なのは」

「責任もってわたしと一緒に散歩しようなの」

そういつて何故か、首根っこを掴まれてズルズル引きずられる俺。

「カムイ」

「まで？！これってどう考えてもお散歩という名の断罪だろうが！
！？」

「なのは」

「やだな、こんな美人で優しい女の子とデート出来るのに何で冷や汗かいてるの？」

「スバル・ティアナ」

「（自分でいっちゃ駄目ですよ、なのはさん・・・）」

「なのは」

「スバル？ティア？一緒にお散歩・・・する？」

「スバル・ティアナ」

「いいえ！ご遠慮します！カムイさんとお楽しみください！！」

こいつら俺を売りやがったな！！！？てか女の子なのにこんなに力

強いのかよ！

全然抵抗できない・・・って何故、裏路地につれていかれる！？
 というか何故、レイジングハート構える？！てか何、その魔力量！
 ？てかSLB！？

十
な
の
は
十

「ちよつと痛いので……我慢できる?」

出来ません。無理です。

そんな俺の心の声など聞こえるはずもなく、刹那、桃色の光に俺は包まれていった。

転生して楽しくなりそうだと思ったけどあれだな．．．1つ教訓が
出来た。

魔王関係フラグは触らないほうがいい……死ぬ、確実に……そして先立つおー！。

十
な
の
は
十

「スターライト……！ブレイカー……！！！」

†カムイ†

「ぎゃ ああああああああ————す——！！！」
「!?」

まあ……あれだな、退屈しない人生にはなりそうだ……（バタツ

1 転生者と魔導器と喫茶店（後書き）

ご意見、ご感想などお待ちしております！またお会いいたしまし
う。

今日の一言

くわたしのコメントなどお弁当の醤油さしのようなモノ

2 魔法少女とバトルと兄貴像

†ティア†

「というわけなのよ・・・まったく・・・デリカシーというモノがないのかしら（怒）」

†カムイ†

「その話はもう3回目だぞ、ティア。はいよ、ミルクレープとダーリン」

この日、やってきたのはジアビスの支援キャラ『ティア・グランツ』で不機嫌モードだ。

†ティア†

「それにしてもあなたのお店はいつから・・・」

そう言いながらティアは上を見上げる。それと同時に俺も溜息交じりに上を見る。

†ティア†

「青空喫茶店になったのかしら？」

質問の答えはお前の隣にいらっしゃる方だよ。ああ、2日ほど前にやってくれやがったこ

の青空喫茶店を開かざるえなくした元凶、もとい魔王。

†なのは†

「ははは………すいません」

＋カムイ＋

「俺もヴィヴィオを止めなかったのも悪かったが住宅スペースをピンポイントで吹き飛ばす事はねえだろ……、なのは」

この喫茶店の2階が俺の住宅スペースで寝室もあったのだが数日前のSLBによって跡形もなく吹き飛ばされて今現在は高町家に居候しているわけだ。

＋なのは＋

「それにしてもやっておいてなんだけどよく生き残れたね、カムイ」

ああ、それは俺も今更ながら思うよ。あの岩盤事吹き飛ばす威力のSLBを秘奥義で何とか相殺した。といってもOVL・LEVEL4まで放出する羽目になってしまった。と入ったものの次の日まで筋肉痛がとれなくて今日の朝にやっと回復してどうにか店に復帰する事が出来たわけだがあれだな……生きてるって素晴らしい。

＋カムイ＋

「家は吹き飛ばは、街の荒くれ共と大乱闘になるは……運勢悪すぎるだろ……」

街に食材の買い出しに出かけて確かヴィヴィオの奴が通っている学校の生徒にチョッパ

イ出してる馬鹿共いたから問答無用で叩き潰してやっただけと考えてみれば魔法学校

の生徒なんだし自分で撃退出来た気もする。

揚句にはまたザギと愉快的仲間達が現れて仕事仲間やら狩り仲間と叩き潰してその流れ

から勧誘に合いまくって一日中、逃走する羽目になるなど俺の設定がおかしい。

＋ティア＋

「そういえばヴィヴィオちゃんはどつしたの、なのは？」

＋なのは＋

「確か今日はお友達を連れてくるって言ってたよ？同じ学校の生徒さんだとか」

ほう、それならちよつくら試作で作っていたサンデーの試食でもしてもらうか。

こうやって新作を試食してもらうのは大体、ヴィヴィオやなのは達に食べて貰っている。

そんな話をするとはやはり魔王といえ女の子、なのはも嬉しそうな顔になった。

＋なのは＋

「カムのスイーツはいくらでも食べられちゃうから後で結構、辛い事になるんだよね」

＋カムイ＋

「だったら食べるの抑えればいいだろ？ってか、その分、消費すんだし問題ないんじゃない」

「なのは」

「男の子には分からない切実な問題もあるのよ・・・わずかな事なんだけどね・・・」

「ティア」

「なんとなくだけど共感できるわ、なのは」

なぜかティアとなのはの2人は手を握り合って何か響きあうモノがあったらしいがスルー。

それからしばらく経ってヴィヴィオがその友達達をつれてやってきた。

「ヴィヴィオ」

「カムイお兄ちゃん！ただいま！」

「カムイ」

「おかえり・・・ってヴィヴィオ、ここは家じゃないんだから。それおかしいぞ」

確かに俺は高町家にお世話になってはいるがとりあえずここは仕事場なのである。

それからそれぞれの友達をヴィヴィオが紹介してくれる。

髪型はいわゆるツインテールまたはツーテール（下に付いている）で、キャンディー型

のアクセサリーが耳のあたりに付いている。ヴィヴィオとは1年生の頃からの親友らし

く名前を『コロナ・ティミル』。見た感じはとても礼儀正しい感じの子だ。

「コロナ」

「はじめまして」

2人目は頭の上にリボンがあり八重歯とショートヘアが特徴。ヴィオとコロナと

出会ったのは3年生の学期末だったが既に親友の『リオ・ウェズリ』。元気っ子らしい。

＋リオ＋

「どうも！」

3人目が右目が紺、左目が青で微妙に色が違うのと、髪の毛の右側に付けた大きな赤いリボンが特徴。碧銀の髪と虹彩異色の眼ってヴィオと似たような感じだな。

え〜と確か前に漫画で見た時はこれが『霸王』の証かなんかだったんだよね？そして彼

女の名前は『アインハルト・スタラトス』、とても物静かで礼儀正しい性格だな。

＋アインハルト＋

「はじめまして・・・」

＋カムイ＋

「この喫茶店 Vivid のマスター、カムイだ。よろしくな、3人共？」

＋なのは＋

「ヴィオの母親で高町 なのはといいます。これからもヴィオと仲良くしてね？」

「ティア†

「わたしはティア・グランツ。彼とは仕事仲間でなのはとお茶友達なの」

さてとそれでは早速、俺が新しく作った新作サンデーを彼女達に食べて貰おう。そう思
つて準備を始めようとしたのだがアインハルトが突如声をかけてきた。

「アインハルト†

「あ・・あの！」

「カムイ†

「ん？俺に何か？」

さらにはコロナとリオもアインハルトの横に並んで何か言いたいらしい。

「リオ†

「カムイさんにお願ひがあるんです！」

「コロナ†

「あの！インターミドル開催までわたし達のコーチになってくれませんか！」

「・・・はい？」

「カムイ†

「いや・・俺はただの喫茶店のマスターだぞ？確かインターミドルってルーキー達が

最強を決める魔法戦の大会だよな？俺よりかはスバルとかの方がいいだろ？」

だがそれに対してヴィヴィオが3人に余計な事を教えてしまったらしい。

＋アインハルト＋

「カムイさんは元機動六課の方々とも互角にやり合える実力とヴィオさんから聞いています。わたしはもっと強くなりたい、公式の大会で霸王流を証明したい」

確か霸王流ってアインハルトが使ってたカイザーアーツ・・・とか言ってたかな？

＋カムイ＋

「そうは言われてもな・・・、何で俺なんか頼むんだ？」

すると俺は忘れていたのだがこの前、助けた生徒達がこの子等だったようだ。

＋カムイ＋

「（やべえ・・・俺って結構、人の顔を覚えるまで時間掛るが・・・記憶ねえぞ）」

＋アインハルト＋

「あの時のあなたの強さは今まで見た動きでも最高クラスでした。それにその後にあった

戦闘も見させていただきましたが圧倒的だったと思います」

どうやらその後のザギ戦も見ていたらしい。いや・・神様から貰った力だしな(汗)

最初からチートみたいなもんだ、何種類もの職業になれる上にOVLとレディアントドラ

イブ (RD)、さらにその上のミュートロギア・ドライブ (MD) っていう秘奥義級の

技をRDのように発動する事が出来る究極奥義つてのもあるらしい。ちなみにザギ達を倒した際にRDを使ったからその事を圧倒的と言っているようだ。

マイソロ3をやったことがある人なら分かると思うがはめたら相手終わりだぜ？

ナリオナ

「あの時のマスターさん、すっごいカッコよくて！あんな風に強くなりたい！」

ナコロナ

「わたしももっと強くなりたいんです。IMで勝ちたいんです」

ナアインハルト

「わたしもヴィヴィオさんががんばってるのに今のままで立ち止まりたくないです！」

ナヴィヴィオ

「わたしも教えて欲しい！皆に負けてられないもん！」

なんつつか・・・凄いな、この子ら。俺がこの歳の頃なんてただ呑気に遊び呆けてた記

憶しかないってのにこの歳でこんだけ自分の夢や目標を明確に持つてるなんて。

俺はたまたま神様から今の強さをポンツと与えられてそれが俺の人物像になっただけで

俺自身は何の努力もしてないけどこの子等はここまでかなり努力してたんだろうな。

この世界に転生する前の俺って何か夢あったのか？こんな風に本気になれるような、そ

んな熱くなれるような夢・・・ただ毎日がつまらないかと思ってただけだろ。

＋カムイ＋

「（その俺がこの子達を教えられるのか？逆に俺が気付かされてるくらいなのに）」

俺が難しい顔をしているとなのはが話を始める。

＋なのは＋

「カムイ、人が誰かに教えを乞うって事はその人に憧れや、夢を見ているから頼むんだ

よ？皆もカムイにそういう想いを抱けたから頼んでる、そういう事ってなかなかない

と思うし、あなたは確かにそれに値する強さを持つてると思う」

『強さ』か・・・確かに『倒す強さ』はあるかもしれないけれど俺にはこの子達の持つ

ているような『意志の強さ』はない、ただ倒すのが強いだけでいいのだろうか？

＋ティア＋

「ならこういうのはどうかしら？あなたにこの子達がクリーンヒットを決められたら教

える、『諦めさせたら』コーチの件は無し、4人共、それでどう？」

「なのは」

「わたしやスバル達で随分前にやってた訓練だね」

「ティア」

「ええ」

これに4人は即決でOKをだし、俺も流れでそのまま承認してしまいバトルが決定した。

「カムイ」

「（俺は……）」

「なのは」

「カムイ！よそ見してたら駄目だよ！」

気付いた時には3人共、デバイスを使ってセットアップしながらこちらに向かってくる。

「アインハルト・ヴィヴィオ・リオ・コロナ」

「……セットアップ！」「……」

アインハルトとヴィヴィオ、そしてリオは変身と同時に大人モードと呼ばれる形態にな

ってコロナも彼女のお得意の技でもある創生起動の力を発動する。

「コロナ」

「創主コロナと魔導器ブランゼルの名のもとに！叩いて碎け」「ゴ

「ライアス」！！」

彼女の後ろに巨大な人型のゴーレムが現れて腕を振り被り、強烈な一撃を繰り出す。

「カムイ」

「レディアント　メア　ハイブリーダー！」

俺の身体にノースリーブのハイネックシャツと紫紺の服を身に纏い、背丈と同じくら

い巨大な幅広の片刃剣・バスターソードを振るい一撃を受け止める。

「アインハルト」

「はあっ！！」

素早い動きで一撃を繰り出してくるがそれを腕で流し、そのまま蹴り飛ばす。

「ヴィヴィオ・リオ」

「ソニックシューター！」　「轟雷炮！」
（どんごんぱう）

ヴィヴィオが射撃魔法を繰り出し、さらにアインハルトの攻撃で両腕を使わせたところ

にリオが雷を纏った蹴りで突撃してくる。

「カムイ」

「（本気の眼だな。本当に強くなりたくて真っ直ぐな目・・・眩し過ぎるっての）」

「なのは」

「（なんだろ・・・強いには強いと思うけど・・・カムイ、迷いがある？）」

一瞬で裏に引いて前方をバスターソードで薙ぎ払う。

「+アインハルト+
はおうりゅう覇王流・破城槌！」

拳を地面に叩き付けてその衝撃を地面に伝わらせて攻撃をしかけてくる。

「+カムイ+
まじんけん魔神剣・改！」

通常より威力の高くなった巨大な魔神剣が地面を這いながらアインハルトの一撃を押し返して相殺するとすぐさま接近して攻め込む。

「+カムイ+
げんりゅうざん幻龍斬！」

「+アインハルト+
くっ！？」

「+ヴィヴィオ+
「ってお兄ちゃんが消え・・・はっ！」」

突きを繰り出すと同時に一瞬、加速して相手のヴィヴィオの後ろに周り込む。丁度ここからだとアインハルトも一直線上で巻き込める位置にある。

＋コロナ＋

「今なら裏をとれる・・・！」

＋なのは＋

「（でも隙を露呈しすぎてる。まるで攻撃してくださいって言うようなものだよ）」

そう、裏にはコロナがゴーレムと共に迫ってきているが流れはすでにできていた。

＋カムイ＋

「瞬連塵！断空剣！幻魔連牙衝！」

間合いを詰めた後に高速の三連突きに回転斬りによって竜巻を生じさせつつ斬り上げ、

神速の八連撃を繰り出すがそれを2人で防ぎ切り、コロナの攻撃をすでに待っていた

2人は飛び退いてそこにゴーレムが攻撃を仕掛けてくる。

＋コロナ＋

「ギガントナックル！！！」

＋カムイ＋

「レディアント　メア　ハンター！」

すると羽をあしらった帽子に白い陶磁器のような素材で作られた大型の弓に緑を基調

とした狩人の服を纏った形態になって瞬時に技を発動する。

＋カムイ＋
「斜陽」

ゴーレムの攻撃が直撃したがその場所にはすでに姿は無かった。

＋コロナ＋

「えっ？一体、どこ……」

＋リオ＋

「コロナ、真上……！」

＋コロナ＋

「……」

俺はさっきの技でゴーレムの真上を取っており、すでにOVL・4状態になっていた。

＋ティア＋

「あの瞬時のスタイルチェンジ、あのバリエーションの多さも彼の強さの1つね」

＋なのは＋

「うん、どんな状況かでも1人であらゆる戦闘スタイルを駆使して覆せるオールラウン

ダー。彼が戦闘に入ってくれるとかなり助かるからね、視野も広いし」

そして斜陽の攻撃と共に魔法陣を展開してゴーレムを貼り付けにして真上に飛上って

弓を構えながら逆さの状態になり、ゴーレムと俺の前にさらにもう

1つ魔法陣が展開する。

＋カムイ＋

「華麗に・・・ターゲットロックオン！クライシス・レイン！」

強力な5つの矢を放ってゴーレムと付近にいたコロナ達をまとめて吹き飛ばす。

＋ヴィヴィオ・アインハルト・コロナ・リオ＋

「「「うわああああああああ！？」」「」「」

そして着地する。あの一撃をくらったら只で済むとは思えない、もう戦える状態ではない。

＋ヴィヴィオ＋

「まだまだ！！！！ディバインバスター！！！」

だが粉塵の奥からヴィヴィオが確か「高速砲」タイプのディバインバスターを放つ。

＋カムイ＋

「落葉らくよう」

さつと体勢を横にして瞬間移動でその射線上から回避して粉塵目がけて矢を放つ。

＋アインハルト＋

「はっ！！やっ！！！」

その矢をアインハルトが蹴りと拳で叩き落とす。そして他の2人も

立ち上がった。

＋カムイ＋

「もう諦める。そんな状態で俺に一撃入れられるのか？」

＋ヴィヴィオ＋

「諦めないよ・・・ママと約束したもん！転んだって立ち上がれる強い子になるって」

確かに言ってたな、Strikersの一番最後の戦いで確かなのはとの約束だったかな。

＋アインハルト＋

「それに敗北条件は『諦めさせたら』でしたよね？」

＋カムイ＋

「（そういえば・・・ってティアのヤツ・・・！）」

軽く視線を向けるとティアの方は視線を逸らして口笛を小さく吹いていた。

まったく・・・やってくれたな・・・。つまりはこいつらが諦めるまで再挑戦は可能。

尚且つ俺はそれを承認したわけだし諦めるまで何度でも付き合う必要があるわけね。

＋リオ＋

「わたしは元気だけが取り柄だもんね・・・！まだまだ行くよ～～～！」

＋コロナ＋

「わたしもゴーレムもまだまだ頑張る・・・！」

本当に・・・俺がちっぱけに想えるほど眩し過ぎるっての、この子等の眼は・・・。

それなのにちっぱけとか言ってる俺をこの子達は尊敬や憧れの眼差しで見てください

るわけだけど俺はこのままでいいのか？ただ生き返って楽しけりやいいってそれだけ

に満足してる生き方でこの子達に向き合えてるのか？本気で？

十なのは十

「本当にわたしの変なところだけ似ちゃったかな・・・？頑張り過ぎだよ・・・」

十ティア十

「でもそれだけ本氣って事でしょ？強くなりたからカムイに立ち向かっていつてる」

ヴィヴィオ達は本氣の想い・・・俺はどうだ？この子達に向き合うには・・・。

十ヴィヴィオ十

「当然だよ・・・！だってお兄ちゃんは・・・ママと同じくらいに」

そっいいながら立ち上がるヴィヴィオがファイティングポーズを取りながら言った。

十ヴィヴィオ十

「世界で一番強いわたしのお兄ちゃんって憧れてるし、誇りに思える人だから！」

＋カムイ＋

「！」

こいつそこまで・・・。

＋カムイ＋

「（俺が一番強いか・・・。あつ・・・。ははっ・・・なんか変な事思いついちまったな）」

そういつて俺は一番レベルの高いフォームであるソードマンに変身する。

この時、俺は初めて自分の中で生きていく上での『目的』がふと頭に浮かんでいてそ

れはさっきのヴィヴィオの一言で生まれたモノだった。転生して目的を持っていなか

った、いやその前からただ世界にいただけの俺に無かった明確な目的。

＋カムイ＋

「（悪くねえな・・・、ヴィヴィオがこの子が誰にだって自慢できて誇りに思えてそし

ていつだって憧れてくれてるそんな強い兄貴に・・・ヒーローみたいな男に）」

そして俺は深呼吸をして精神を落ち着かせる。考えてみたら俺が守りなんて性にあっ

てなかったつけ。ゲームでも防御なんて無視の超攻撃型、攻撃が防御みたい奴だっ

てのに強いとこ見せるなら盾なんざ無しの剣士タイプ・・・それが

俺の好みだ。

＋なのは＋

「ねえ、ティア。カムイの眼、最初より力強くなってるように思えない？」

＋ティア＋

「ええ・・・強いには強かったけど最初はなんだか考えすぎてる感があつたわね」

ああ、考えてたね。俺らしくもなくグダグダとくだらない事をさ・・・。本気でぶつかって来てる相手に対してどう応えるなんて足し算、引き算より簡単じゃなか。

＋カムイ＋

「悪かったな、お前ら。どうやら俺はちよいとスランプ入ってたらしい、戦いの中で迷い迷いなんてしてたらお前らに教えるどころじゃねえよな」

そういつて俺はもっていた盾を放り投げた。守りなんて考える必要はない、攻撃で守備も一緒にやりや同じ事、ある意味じゃ防御を捨てて攻撃に特化させた状態だ。

＋アインハルト＋

「盾を捨てるなんてハンデのつもりですか・・・！」

＋カムイ＋

「いや違うな・・・ハンデじゃねえ」

俺は目を閉じて武器に呼吸を合わせる。俺にはわかるこいつはまだ
本当の姿じゃない。

そつだろ・・・？輝ける光器 レディアント・ライトフェンサー
刹那、俺の持っていた剣は光と共に姿を変えて細見で金の装飾が施
された深い蒼の刀
身を持った長剣が現れてそれを振るうと同時に俺の服も黒のロング
コートタイプのモ
ノから白をベースに銀の装飾がされているモノに切り替わった。

「なのは」

「えっ！？カムの姿が変わった？それに武器まで進化してる！」

「ティア」

「彼もさらに強くなったというの？理由はどうあれ迷いが消えたか
ら・・・？」

さすがに2人も驚いていた。つうか俺も驚きだぜ、ちょっと開き直
っただけだつての
にこんなにも自分への自信が違ってくるなんてな、前の俺がお笑い
者だぜ。

「カムイ」

「悪かったな、お前ら。ここからが・・・本当の本気だ・・・！！」

「ヴィヴィオ・アインハルト・コロナ・リオ」

「うん・はい！」

本気でぶつかるならこいつらの『最強』をねじ伏せるしかねえよな？

†カムイ†

「全力全開になるまでまってやる、残りの魔力全て込めて挑んでこい！」

†アインハルト†

「言われずとも全力で行くのが最大の礼儀。加減はできません」

†ヴィヴィオ†

「ママの娘だもん！いつだって全力全開だよ」

†リオ†

「コロナ、いくよ！」

†コロナ†

「うん！」

4人がそれぞれ今までよりかなり強い、本当の本気の魔力を込める。そして俺はというと新たな剣技を思い出せていたのだがどうやらこれがゲームでいう『取得イベント』のようなものらしい、ややこしいもんだ。

†神様†

（君は一度むけたようだから新しいテイルズキャラ以外が使う技を追加しておいたぞい）

ありがとう、神様。

†ヴィヴィオ†

「全力全開！アクセルスマッシュ！」

拳に光の尾がかかるようなエフェクトがかかり、そのまま突進してくる。

「アインハルト」

はおうだんくつけん
「霸王断空拳！！」

足から練った力を拳に込めて上空から振り下ろすように繰り出してきた。

「リオ」

ぜっしょうえんらいほう
「絶招炎雷砲！」

身体能力を強化した上で、炎&雷を発動させて蹴りを繰り出す。

「コロナ」

「ブラストロケットパンチ！！」

腕をパージさせた状態でスクリューのように回転させながらロケットパンチを飛ばす。

4人を正面から受けて立つ俺。

そしてライトフェンサーから爆炎が吹き上がり、焰をまとったまま渾身の力で振り抜く。

「カムイ」

ほう
「鳳！吼！破——！！！！」

斬り上げの斬撃波からさらに飛翔する鳳凰のオーラとの二重の攻撃を放つ。

「なのは・ティア」

「っ！」

そして眩い閃光に周囲は包まれたのだった。

・ ・ ・ ・

†なのは†

「チャレンジ失敗・・・ってところだね」

その後、気絶してしまった4人をなのは達がリオとコロナ、俺がヴィオとアインハルトの2人を喫茶店のところまで連れてきてソファで寝かせていた。

†ティア†

「彼女達の実力であそこまでやれただけいいと思うわ。実力差があり過ぎるもの」

俺はというと当初食べさせる予定だったストロベリーサンデーを作っていた。

†ヴィヴィオ†

「・・・ん・・・うん・・・あれ？わたし・・・」

どうやらヴィヴィオが起きたらしい。

†なのは†

「どう、ヴィヴィオ？起き上がる？」

「ヴィヴィオ」

「うん、大丈夫だよ、マ・・・痛たっ・・・（泣）」

あれだな、ちとマジでやり過ぎたかもしれん。つつかなのは・・・睨まないで怖いから（汗）

「ヴィヴィオ」

「あつ、そうだ！勝負は??」

「なのは」

「ヴィヴィオ達の負け。カムイには攻撃は通ってなかったから」

最後の鳳吼破の一撃で4人を纏めて攻撃が届く前に撃破したのである。

「ヴィヴィオ」

「そんな・・・」

かなりしょぼんとしてしまふヴィヴィオに俺は作り終わったストロベリーサンデーを

差出すと顔を見るわけでも無く仕事に戻りながらこれだけは言った。

「カムイ」

「確かコーチの条件を破棄する条件はお前らが『諦めたら』だったな。お前らがまだ

性懲りもなくやるってんなら空いてる時に相手してやる、やる勇氣があればだな」

そういいながら他のアインハルト達分のサンデー作成に取り掛かる。

「ヴィヴィオ」
「・・・・・・・・っ！」

ようするにこいつらが諦めなければ何度でも挑戦は受けるという事。
俺に一撃を与える
くらいになればそれなりに強くはなっているだろうし、そこに至るまでに何度でも叩きのめされればタフさだって身に付くだろうという俺の自己解釈の考えでもある。

「ヴィヴィオ」
「ありがとう、カムイお兄ちゃん！やっぱり大好き〜〜」

思いつきり腰の辺りに抱き着かれる。一応盛り付けしてるから動かしないでくれ（汗

「ティア」
「（あなた、わたしが言った事を逆手にとって教えてあげるつもりだったのね）」

洗い物を手伝っているティアがそう小言で言ってきた。

「カムイ」
「さあな、たまたまお前がそういう条件にしたのに乗っちゃっただけの話だ」

ようするに完全実技型の『コーチ』ってわけさ。

「アインハルト」
「んっ・・・・・・・・ここは・・・」

＋リオ＋

「はれ？」

＋コロナ＋

「痛っ・・・」

＋ヴィヴィオ＋

「皆！皆！聞いてー！お兄ちゃんがね！」

そういつて嬉しそうにアインハルト達にさっきの話をし始めるヴィヴィオだった。

＋なのは＋

「カムイも妹には甘々だね？」

＋カムイ＋

「だからたまたまそうなったと言っておろうが・・・」

＋なのは＋

「はいはい、そういう事にしておいてあげる」

口を押えて可笑しそうに笑いを堪えているのは。くそお・・・別にツンデレとかじゃ

ねえぞ、俺は。ていうか男でツンデレなんて気色悪（ry

＋カムイ＋

「お前ら、ストロベリーサンデー出来たからこれ食って今日は家に帰宅。続きをしたきゃ

明日から暇な時間にこい、いいな？」

「ヴィヴィオ・アインハルト・コロナ・リオ
「「「はい！」「」」

こうして『たまたま』な理由でコーチ擬きをする事になったが俺も
コーチの勉強が必要
そうだな・・・でもこの世界での夢というか、目的みたいなのは見
つけられた。

『世界で一番強い兄貴』・・・あいつが誇れる自慢の兄貴像、それ
が俺の目標になった。

2 魔法少女とバトルと兄貴像（後書き）

ご意見・ご感想・また次に行く世界などのネタなどお待ちしております。

そして今回の一言

リンカーン曰く・・・

君の決心が本当に固いものなら、もうすでに希望の半分は実現している。

夢を実現させるのだという強い決意こそが、何にもまして重要であること

とを決して忘れてはならない。

そしてわたしのコメントはボトルの蓋に張ってある1点シールのようなもの。

3 フェイトとディセクターと甘い魔法

†子供A†

「うわああああん・・・痛いよぉ～」

†カムイ†

「ほれ、ちよつと貸してみろ」

俺の翳した手から淡い光が放出され、擦りむいた子供の足の怪我を簡単に完治させた。

†子供・B†

「凄い！なおったっ！」

†子供・A†

「ぜんぜん痛くないよ、カムイ兄ちゃん！」

その場でぴょんぴょん飛び跳ねてみせる子供に苦笑する。

†カムイ†

「あんまりはしゃぎ過ぎてまた怪我するなよ？ほら、いきな」

†子供・A 子供・B†

「「ありがとうね～」！」

最近、また新たに使える様になった技・・・というか修行やら訓練をするとゲームみたいレベルが上がるのか技を思い出すようになっていてこれも思

い出した能力だ。

どうやら俺の世界設定のモデルはマイソロの『ディセNDER』らしい、この能力も原作では人の穢れを打ち消したり、仲間を回復させる描写もあったりしたな。

†フェイト†

「カムイ」

†カムイ†

「んっ？フェイトか、おはようさん」

振り向いた先にいたのは管理局の制服姿のフェイト。愛車も一緒にだし、仕事帰りか？

†フェイト†

「その力、思い出したんだね？」

†カムイ†

「まあ、最近になってだけだな・・・」

マイソロをやった事がある人は分ると思うけどクリアした後記憶を持った状態で続

きやるか、記憶を失った状態で最初からまたプレイするかを選ぶわけだけでも俺

はどうやらこの『Vivid』の二年前、つまり『Striker S』の時代からすでにこ

の世界にいたらしく、それまでは突如現れた次元漂流者として戦っていたらしい。

＋フエイト＋

「2年前の事とか思い出せた？」

＋カムイ＋

「いや・・・最近になって技とか能力は戻ったけど記憶まではな」

というよりは『俺自身』はこの数週間からの記憶しかないが2年前からこのミッド

チルダで戦っていてライトニング分隊に所属していたらしい。

なのはを知っている人なら思い出せるだろうけどルーテシアの洗脳だとか、殺されたは

ずのレジアスにドゥーエの蘇生、ヴィヴィオの聖王の力、さらにはルーテシアの母親の

メガーヌの意識を覚醒させ、衰えた体をも復活させるなど以前の俺の力は万能だったよ

うで数々の奇跡を起こして管理局内では『英雄』扱いされているようだった。

＋カムイ＋

「確かに店に来る管理局員から何故かサインを求められる事もあったが・・・英雄って

言われてた時の俺はいないわけだし、妙な気分ではあるな」

それに俺は転生して今の『カムイ』になった。戦う目的だとか、強さに対する渴望とい

うのも最近になって持てるようになったわけで『英雄』なんかとは程遠い。

＋フエイト＋

「でもわたしは覚えてるよ？助けに来てくれたカムイが言ってくれ

た言葉」

これは彼女に聞いた話だ。

・ ・ ・

「エリオ・キヤロ」

「戦つて！」

・

「スカリエッティ」

「ふつ、すでに動く事すら出来ない者に何が出来る。君達も利用されるだけの駒だと

言つのがわからないのかね？」

「カムイ」

「ざけんじゃねえぞ、この糞野郎！！！！」

扉をブチ破り、スカリエッティのラボに突入してくるカムイ。襲い掛かってくるナンバーズのセツテとトーレを後退させてフェイトの救援にやってきたのである。

「カムイ」

「よお、スカリエッティ。決着つけに来たぜ！」

「スカリエッティ」

「弱者には弱者が集まるか、君も馬鹿な男だな、君が罵倒した人種と同じ者を助けに

やってくるなどそうは思わないか、プレシアの操り人形よ」

＋フエイト＋

「くっ……！！」

だがその言葉にカムイは完全に怒りが爆発したように怒号をあげた。

＋カムイ＋

「ふざけんな！最弱野郎のてめえと世界で一番強い力を持つてるところを一緒にするな！」

＋スカリエツティ＋

「なんだと……？憎しみを持ちながらわたしを殺す機会を自ら放棄し、何も出来ず

にただ伏せるだけの彼女が強い？何とも非理論的な考えだな、君は。敵を倒す力も

ない者のほうがよほど弱者ではないのかね？」

＋カムイ＋

「こいつが刃を振るわなかったのはこいつが強いからだ。フエイトは傷つく事の痛み

を知っている。こいつが斬らなかったのはその痛みを知っているからだ、それが例

え憎しみをもった男でも自分の中にある信念を貫いた」

再び襲ってくるトーレとセツテに応戦しながら言葉を続けるカムイ。

＋カムイ＋

「もう1つの強さは、誰よりも深い優しさを持つてる！敵や恐怖や苦しみに抗う力

を言うんじゃない、今戦ってるエリオやキャロの持っていた闇を

こいつはその優し

さでもう一度、光のある場所に導いた・・・はあああ！！！！」

「セツテ」

「くっ！？」

セツテを吹き飛ばしてOVLを発動すると剣を天に掲げ、それに光が収束する。

「カムイ」

「はあああああああ！！！！光竜！滅牙槍！！！！」

光のオーラを纏った剣を突きだし、複数の竜を放つとセツテがそれに巻き込まれて上の壁に叩き付けられ、大爆発と共に地面に転がった。

「カムイ」

「本当の強さってのはどんな闇も包み込む事が出来る安らかな優しい心を言っただよ！」

正面から向かってきたトーレを渾身の上段から振り下ろした斬撃で叩き潰し相手を睨む。

「カムイ」

「今は立てないなら俺がまた立ち上げれるまで護りぬく。こいつは・・・」

剣に焔をまとわせてそれを気合諸共、鳳凰の斬撃波を放ちながら叫んだ。

＋カムイ＋

「俺の護るべき仲間だ！この命に代えてでも護ってみせる！！」

・ ・ ・ ・

＋フエイト＋

「あれからカムイがゆりかごを止めるために特攻してしばらくしてから記憶を失った

状態で空から落ちてきてわたし達の事を忘れてしまっていたけれどそれでも嬉しかった・・・また戻って来てくれたから」

聞けば聞くほど俺とは程遠いまさに『英雄』だったかつての『カムイ』という人物。

って・・・これじゃ駄目だな、ヴィヴィオの憧れのヒーローになるって決めたのに前の

『カムイ』を羨ましがってるようじゃ。今の俺の『カムイ』にならないと意味がない。

＋カムイ＋

「でもまあ・・・英雄と言われるのはあまりいい気はしないな。持て囃されるのは苦手だ」

＋フエイト＋

「ふふっ、本当に褒められるの苦手だよ。カムイって」

前にも言ったがどうにも褒められた事がないせいだなれないんだ、これだけは。

†フェイト†

「皆、カムイの強さばかりに目が行きがちだけどもう1つ凄い魔法を持ってるしね」

†カムイ†

「もう1つの凄い魔法？なんだ、それ？」

言われた当人の俺が覚えがない。俺、そんなに強い魔法なんて使えてたのか？

†フェイト†

「カムイの使える甘い魔法だよ？」

フェイトの意図する事がわからずに首を傾げる俺。

†フェイト†

「うん、カムイが作ってくれる甘くて美味しい魔法？って言っているのかな？」

†カムイ†

「甘くて美味しい魔法って・・・まさかデザートとかの事か？あれのどこが魔法なんだよ」

フェイトの口から飛び出した『強い魔法』の正体は俺の作るデザート系？なんだ、そら？

†フェイト†

「戦いだけじゃなくてカムイの作ってくれるデザートってどんな泣いてる子でも怒ってる

子でもすぐにとびきりの笑顔に出来るでしょ？それって凄い魔法

だよ？」

そんなものなのか？俺はただ単に食べて貰った料理を褒めてくれるのが嬉しくてやってるだけだつてのにそれがそんなに凄い魔法だったとは思わなかった。まあ、俺でも本当に美味しい料理を食べたら自然とにやけてしまうものだから分るかも？

†フェイト†

「カムイはもつと自信をもっていると思う。少なくともわたしにとってあなたはとって

も素敵な英雄さんだよ？あなたが仲間であってくれて誇りに思えるもの」

†カムイ†

「フェイト・・・ははっ、何だかな？英雄だつてのに女の子に何度も励まされてるっ

てんだからカッコがつかないったらありやしない」

転生してから元の自分と今の自分とのギャップがありすぎて俺自身がまだ追いつけていないつてのも問題なのかもしれない。

やっと今の生活に慣れ始めたレベルで戦い事態も思い出す記憶任せで自分の動きでやつ

ているわけでもないし、俺自身が強くなって『カムイ』を成長させるしかないようだ。

戦いにおいても、人としても、この世界で暮らしていくためにも。それからフェイトと談笑しながら店の方まで送ってもらう事になつて甘える事にした。

＋カムイ＋

「何？ウェンディが急に検診がはいつてこれなくなった？」

＋ヴィヴィオ＋

「うん」

ヴィヴィオの話によるとウェンディの身体に問題が起きていないかどうか定期的に見て

いるようなのだがうちのバイトが忙しくて前回いつていなかったよ
うで今日、来るよう

に言われたようでバイトにはこれないという。

＋カムイ＋

「って・・・今日は稼ぎ時の日で客も結構な日だし、さすがにヴィ
ヴィオ１人はきついな」

はつきり言うウェンディがいてもかなり忙しいくらいなのでウエ
イトレス１人はまずい。

と言っても雇っているのは２人だけだし・・・こりや今日は地獄だ
な。

＋フエイト＋

「それなら・・・わたしやろうか？」

＋カムイ・ヴィヴィオ＋

「えっ？」

・ ・ ・ ・

＋カムイ＋

「人数は補充したが考えてなかった……」

そう、フェイトは管理局でもかなりの人気を誇る女性だ。ファンクラブもあるくらいで

確かネタ本とかだとエリオとかシグナムとか夫役のなのとはとか？

＋ヴィヴィオ＋

「お兄ちゃあ……ん……（泣）」

泣くな、ヴィヴィオ。俺だって泣きたいんだ。完全なる誤算のこの状況。

＋カムイ＋

「なんじゃ、この客の数はあああああああ……！！？」

はつきり言って俺がこの店をやって以来の大盛況というか、満員御礼状態となっていた。

もちろんその原因はフェイト。理由としては彼女にウェンディの服を代わりに来ても

らったのだがサイズが若干小さかったせいできわどい服装になっていたのだ。

というか夏用に買い替えたから露出も多めで男性客がさらに増えていた。

＋フェイト＋

「カムイ、Aセット2つにストサン2つ、HBチーズ1つ、ご注文だよー！」

＋カムイ＋

「あいよ！ヴィヴィオ、4番テーブルにこれ全部、もってつてくれ！」

「ヴィヴィオ」

「は、はい~~~~~!?@@:;↑（今こんな感じ）」

あ・・・あかん・・・これ過労死するぞ。てかフェイト効果すげえ・・・
・（汗）

「?????」

「おい、カムイ。こっちにもいくつか回せよ」

「カムイ」

「つてお前、ユーリ！」

なんと厨房に現れたのはヴェスペリアの前衛で人気キャラ投票1位も獲得した俺もお世話になったユーリ・ローウェルだった。確かに料理も得意だった記憶がある。

「?????」

「僕達も手伝っよ」

「?????」

「はい、隊長」

「?????」

「うふっ、こっついつのも面白そうでいいんじゃないかしら?」

「カムイ」

「それにフレン、アスベル、ジュディまで」

ヴェスペリアのフレンにグレイセスのアスベル、ヴェスペリアのジュディスだった。

これで助かった・・・！・・・ん？待てよ、このメンツってイケメンに色気担当のジュディまでいる・・・なんか嫌な予感がするが・・・嫌な予感はずぐ当たる。

＋カムイ＋

「余計酷くなつた・・・」

男性客ばかりだったのがフレンにアスベルが入ったせいで女性客まで増えてしまった。

＋ヴィヴィオ＋

「もうダメ～～～@@:;」

＋フェイト＋

「あわわっ！？ヴィヴィオ、大丈夫？ヴィヴィオ？！」

＋カムイ＋

「そっちのソファで休ませろ！さすがにこの忙しさでヴィヴィオには辛かったか」

それから厨房班には俺にユーリ、店内班はフェイトにフレン、アスベル、ジュディの4

人でどうにか客をさばいてその日はまさにてんでこ舞いだつた。

・

・
＋カムイ・フェイト・アスベル・フレン・ジュディス＋

「「「「ありがとうございました！またお越しください！」」」」

」

そして最後の客を見送ったところで本日の営業は終了した。

＋ユーリ＋

「ちつとばかり手こずっちまったな。この店ってこんなに売れてたか？」

＋カムイ＋

「うっせえ！売れてたかは余計だ！」

だが今日に限っては強力店内メンバーのお陰ではあるのだが今日は売れすぎだな。

＋アスベル＋

「フレン隊長、さすがに任務の後にこれではおつかれでしょう。休まれた方が」

＋フレン＋

「いや、後片付けまでやって仕事の1つだ。やるからにはしっかりと済ませないと」

＋アスベル＋

「はいっ！隊長」

何とも律儀な上司と部下コンビのおかげで掃除の方も早く済んでしまふ。とは言え、さ

すがにあれだけの客の流れをさばいたお陰で全員、疲労困憊状態だ。そういえば前の俺はルーテシアの母親の衰えも復活させたんだっけな・・・。

＋カムイ＋

「（さっきの子供の時も治れと念じて能力が治癒に変化したんだな、あれの要領で）」

目を閉じて精神を集中させ、ディセンドーの力を『治癒』の力に転換する。

＋フエイト＋

「カムイが光り輝いてる！これってディセンドーの力・・・？」

＋フレン＋

「なんだろう、とても温かい光だ」

＋アスベル＋

「たしか以前の戦いでも味方すべての体力を回復させた時も使っていたな」

＋ユーリ＋

「へっ、こいつは確かに身体の疲れがとれてやがるな」

＋ジユデイス＋

「ええ、さっきまでの疲労が嘘みたいね」

どうやら皆、回復出来たらしい。そしてこれを使って1つ分かった事がある。

＋カムイ＋

「この技・・・使えば使うほど俺の体力は・・・消費・・・されるらしいな」

そこで俺の意識は真っ暗になった。あれだな・・・テイルズ的に言う
とあれだな。

「その後・・・彼の姿を見た者はいない・・・」って死んでねえし！！
そんなどうでもいいつつこみを脳内でやりながら本当に俺はそこで
意識が無くなった。

・ ・ ・ ・

＋カムイ＋

「・・・ん・・・」

＋フエイト＋

「もう・・・皆を回復させて自分が倒れちゃ、ダメだよな」

あれから皆は帰ってわたしは気絶してしまったカムイの看病をして
いました。今日は
ずっと厨房で美味しい料理作り頑張ったから人一倍、疲れちゃった
んだよね？

＋フエイト＋

「言ってなかったけどわたし、あなたに告白してたんだよ・・・？」

決戦前夜、何度も助けてくれて支えてくれていた彼を好きになって

いたわたしは彼に
告白していた。考える時間が欲しいって言われて戦いになった。
戻って来てくれたけど彼は全てを忘れてしまっていた。もちろん告白の事も。

＋フエイト＋

「見た目はあの時のままなのにね……。いつか思い出さないかな
って想ってたけど」

でも昔の事ばかり考えててもダメなのかな？『あの時の彼』ばかり
振り返ってちゃ、

『今の彼』に振り向いてもらえるようにならないと……。でも結構、
難関なんだよね？

こう見えても彼を好きな子って六課の中でも多いんだ。

＋フエイト＋

「ねえ？わたしの気持ちに今のあなたは気付いてる？前のあなた
も鈍感だったよ？」

そういつて頬を突っついてみる。

＋カムイ＋

「んんっ……」

むず痒そうに唸る。それでもまたすぐ安らかな顔で寝息を立てる。
ちよつと可愛いかも♪

＋フエイト＋

「もう一回……頑張ってみようかな？」

そんな事を想いながらわたしは彼が目覚めるまで膝枕をしていました。

・ ・ ・ ・

「ウェンディ」

「というか忙しさが前より酷くなってるッスよー!？」

戻ってきたウェンディが思わず悲鳴を上げる。

「ヴィヴィオ」

「でも体力トレーニングにはなるよ？あつ、いらっしやいませー！」

すでにヴィヴィオは最近のここでのバイトもトレーニングの一環に
してしまっただけ

く前よりさらに精力的に働いているようだ。

ウェンディもバイト代を増やしてさらに頑張ってもらっている。

「フェイト」

「カムイ、Bセットと団子セット注文だよー！」

というのも最近になってフェイトが執務官の仕事が入っていない日
はここに来てウェイ

トレスをやってくれているので前にもましてこの喫茶店は大盛況な
のだ。

「なのは」

「はわぁー・・・可愛いよう、フェイトちゃん」

つつか・・・この世界のなのはってやっぱりフェイトちゃんは嫁的なキャラなのか・・・？

＋フェイト＋

「カムイ〜！」

＋カムイ＋

「なんだ、フェイト！今、ちょっと忙しいんだ！」

そういつてそつちに顔を向けると目の前にはフェイトの顔がドアップで映った。

＋フェイト＋

「んっ（ちゅ）」

＋カムイ＋

「へっ？」

俺・・・何された？

＋フェイト＋

「倒れない様に体力回復のおまじない、頑張つてね？マスターさん」

いきなりの事に放心状態になる俺。さっき頬に触れた感触つてフェイトの唇？

はい？どういう事？俺ってキスされた？キスされました？フェイトに？

あの執務官で隊長でエリート街道いつてる才色兼備のフェイト・T・ハラウオンに？

というより俺の脳内はどうなってんだ？思考回路機能がなくなっ
てねえか？

いや、そもそも何故フェイトが頬にキスしたんだ？何、このラッキ
ーイベント！？

＋ヴィヴィオ＋

「あゝ！カムイお兄ちゃん、お肉焦げてる！？焦げてる！？」

＋カムイ＋

「はい？げっ！？やべえ！！肉が焦げた通り越して炭になっちまっ
たああああ？！」

最近、肉高くて仕入れ費用もばかになら・・・って何現実的過ぎる
発言してる、俺！

＋ウエンディ＋

「ああ！？まつツス、カムイ兄！そこは取っ手じゃなくて金ぞ・・・
！」

＋カムイ＋

「あつちいいいいいい！！！？水！水！水！！！！！！！」

＋？？？？＋

「水？ほい、蒼き命を讃えし母よ、破断し清烈なる産声を上げよ
アクアレイザー！」

ヴェスペリアの魔導師キャラのリタ・モルディオがダンスを踊るよ
うに魔法陣を展開

すると水属性の砲弾を数発撃ってきてそれに俺は身体ごとびしょ濡
れになった。

＋カムイ＋

「リタ、てめえ！！手だけでいいんだよ！全身を濡らしてどうすんじゃない、ボケエ！！」

＋リタ＋

「何よ！あんたが水っていうから親切にも出してあげたんじゃない！」

＋カムイ＋

「限度を知れ！限度を！」

＋客＋

「マスター！うちのハンバーグ定食きてないんだけど！」

＋カムイ＋

「はい、ただいまー！」

＋リタ＋

「ほれほれ、マスターなんだからちゃっちゃと仕事に戻りなさい（笑）」

こいつ・・・あとで苦手な海鮮系と香辛料たっぷり入れた中華丼食わせてやる・・・。

ふっふふ・・・バレないように手を加えて見た目ではわからないようにするがな。

＋カムイ＋

「は・・・は・・・はつくしよん！？」

やべえ・・・風邪でも引いたか・・・？くそお・・・天国から地獄だ
つつつの・・・。

・ ・ ・ ・

†フェイト†

「ありやりや・・・ちょっと攻めすぎたかな？？」

†なのは†

「フェイトちゃん、ちょっとズルいんじゃないかな？」

なのはがちよつとジト目で可愛く睨んできました。実はなのはもカ
ムイが好きなんです。

†フェイト†

「こればかりは、なのはにも負けられないよ？宣戦布告です」

†なのは†

「むむっ・・・！その挑戦、受けて立つんだから！」

ライバルは多いんだからアピールして彼に振り向いて貰わないとね
？負けられないぞ、わたし！

・ ・ ・

†神様†

「おやおや、こりゃ、カムイの奴め、ハーレムフラグでもたった
かの？」

神様の癖にハーレムフラグなどどこぞのオタクか？と突っ込まざる
得ない。

「神様」

「おんや？って誰か、迷い込んでしまったんかいの？人の魂の気
配がするわい」

神様が振り返って水晶で見つめる先には蒼いショートヘアと赤い
髪をポニーテール

のようにしている2人の少女が辺りを見回しているのだった。

果たして彼女達は何故、ここに居るのか？こっぴど期待。

3 フェイトとディセクターと甘い魔法（後書き）

ご意見・ご感想などお待ちしております。

そして次回は作品が追加となります。アノ作品からアノ2人が登場ですよ。

く今日の一言

ラルフ・ソックマン曰く

優しさほど強いものはなく、本当の強さほど優しいものはない。

そしてわたしのコメントはPSPのバッテリーカバーのようなもの。

4 少女達と神の孫と女神+転生者〃無敵? (前書き)

イメージOPとED、それとカムイ専用の挿入曲? など設定してみました。

OP【Anything Connect Goes!】

*元々、ニコ動であったマツシユアップ曲。最初はん? と思いましたたが

聞いてたらなんかアリになってきたので何となく設定にzz

ED【君にできるなにか】

*ご存じウルトラマンコスモスのED。この曲はいまだにMP3に入って

いる好きな曲の1つ。なんで好きか? 細けえことはいいんだよ!
(え

カムイ挿入曲【Bleach Number One (Rock Version)】

*ブリーチの一護vs愛染が始まる前の一護登場シーンで流れたヤツです。

登場シーンでのカット良さが異常だったので専用曲的な感じにしちゃいました。

4 少女達と神の孫と女神＋転生者〓無敵？

＋?????＋

「ここってどこなのよ」

＋?????＋

「知るかよ、そんなもん。わたしだって気付いたらここだったんだ」

2人の少女が神の間に迷い込んでいた。

1人は蒼いショートヘアーにどこかの学生服姿、もう1人は赤い髪をポニーテールに

まとめている黄緑のパーカーにショートジーンズ姿の少女達だった。

＋神様＋

「おやおや、おぬしらも迷い込んでしまった口かいの？」

2人の目の前には白いひげを生やした老人が現れて温和な笑みを浮かべている。

＋?????＋

「あのく・・・ここは一体？」

＋神様＋

「君は自分が死に至ったのは分かっておるのじゃろって。ならその後、行く場所はなんじゃ？」

＋?????＋

「ってちよつと待て！ここはそれじゃ・・・天国かなんかだったのか？」

十 神様十

「正確には神界と呼ばれる神々が住まう世界じゃがの？わしがこの世界の長じゃよ」

神様によれば自分達は元いた世界で死んでしまい、偶然にもここへと辿り着いたようだ。

本来であればそのまま天界へ行くらしいのだがここに来てしまつては天界へ引き返すのは難しいらしい。その間に数世界を跨いでおり、2人の魂状態では無理だという。

十 神様十

「（うむ・・・この2人も転生させてしまおうかの？丁度、カムの奴も向こうの

世界のデータを送ってきおつたし・・・あやつの処なら世話も出来そうじゃし）」

彼女達の今までの生い立ちや死ぬまでを確認していた神様がフルフルと震えだした。

十 ??? ??十

「か・・・神様、どうかしたの？」

するといきなり神様が幼さが残る少女2人に土下座をして猛烈な勢いで謝りだした。

十 ?????? ??十

「ええええ！！！！？」

十 神様十

「す、すまん！我が愚孫が統治する世界でこんな管理体制の下で不遇の死を与えられた

など同じ世界を統治する神としてこれほど申し訳のない事はない、本当にすまぬ！」

神様によると各世界のグループを統治しているのはこの神様の息子や孫、ひ孫などらしく彼女達のいた世界を統治している髪は彼の孫にあたる人物で孫のあまりにも杜撰な管理体制を今になって知った神様はあまりにも不甲斐ない孫に変わって頭を下げたのだ。

十?????十

「お、おい、神様だつてのに土下座なんてすんなよ！わたしらが悪い気がしちまうぜ」

赤髪の少女が慌てたように神様に頭を上げさせる。

十 神様十

「愚孫の世界には後程、わしの世界で転生した男を救済に向かわせるとしよう」

十?????十

「転生した者？」

自分達の前にも同じように死んで転生をした人物がいるようで今は別の世界で暮らした

がら旅を続けているという。

そしてお詫びとして自分達にも彼が開いた世界へと転生をさせてもらいたいと言う。

「?????」

「転生つて事はわたしら、また生き返れるつて事か！」

「?????」

「ええっ！？本当なんですか？」

「神様」

「うむ。そうすればまず世界を見つけてからの話にはなるが君達の世界へと赴いて他の

君達にとつて大切な仲間達を救い出す事も可能だ。それに君達に転生の意志があるな

らこれから向かう世界にいるわしの知り合いの力を借りる事も出来る」

そして資料を見ながらそれぞれの少女に話しかける。

「神様」

「まずは『美樹 さやか』ちゃんじゃの？君は魔女となり、その隣の子『佐倉 杏子』

と共に自爆して死亡。原因としては人そのものへの不信感、そして世界への絶望、と

いう事でいいかの？」

「さやか」

「は・・・はい」

確かにその感情があったのだが何故か今はとてもすっきりとしてしまっていた。あの時は自分にとっての大切な人を奪われ、護ろうとしていた人間の醜さに心身ともに疲れ切って魔女に呑み込まれて親友でいてくれた子を襲ったばかりか最後まで自分を止めようとしてくれていた杏子も道連れにする形で死なせてしまったというのに。

†神様†

「君は肉体の死を経てここへやってきた。この空間は魂の浄化が行われる効果があつての。だからこそ君にあつた蟠りや闇も消えてしまつておるのじゃろう」

ある意味ではリセットされた状態でここに生まれるという事らしい。

†神様†

「君の望みどおりに転生をさせよう。そしてその世界における先輩転生者に助けを求めると

よいじやろう。奴が承諾すれば君たちの世界を見つけ次第、救済に向かわせる。そうす

ればその世界にも本当の意味で平和が訪れるじゃろうて」

†杏子†

「その転生者の先輩つてのはそんなに凄い奴なのか？円環の理だつてあるつてのに」

神様によればその男なら転生した際に選んだ能力によってあらゆる奇跡を起こせるという。

元は自分達と同じ学生だったようだが転生し、新たな世界で自分自

身を成長させながら第

2の人生を懸命に歩いていると2人に説明した。

「さやか」

「でもわたしはヒーローとかは・・・もういいかな。なんか、もう懲り懲りって感じ」

「杏子」

「・・・あつ、なあ、神様。『普通の女の子』ってのはダメなのか？」

杏子は神様にそんな事を聞きだした。

「神様」

「そんな願いでよいのかね？それぐらいの願いならいとも簡単なものだが」

杏子によれば自分もさやかも魔法少女として戦い続けて普通の女の子としての生活とは

程遠い毎日でこんなチャンスが与えられたのなら普通に生活して普通に学校へ行って勉

強をしてもしかしたら恋愛なんてある、ごく普通な女の子になりたいと言った。

「さやか」

「そうだね・・・わたしは失恋しちゃったけどさ。もう一回、恋かしてみたいかも」

「神様」

「そうじゃな・・・あれだけ酷い結末だったんじゃ。もう普通の生

活に戻ってもよいか

もしれんのうゝ・・・あい、分かった。その願いを聞き入れよう」

「?????」

「おつとそうはいかないよ、おじい様」

その声に3人が振り返るとそこに立っていたのは2人の槍を持った戦士のような2人を

従えた青年で神様と同じような恰好をしているのだが姿を見た瞬間、神様の表情が怒り

へと変わって2人を自分の裏に隠れるように立つと威圧感を込めて言う。

「神様」

「この大馬鹿者が・・・！！！生きる者の魂を宇宙の蘇生に転用するとは何事か！そ

れは本来、我々、神の寿命を変換して死ぬまで負う責務、忘れたか、ロキ！」

「ロキ」

「僕はあなたのように醜く歳を取りたくないんですよ。この絶対たる力、そして美貌、

これを宇宙の寿命などのために使うなど馬鹿がする事ですよ？あなたの考えは古臭い

上に効率的ではなゝい・・・高々、子供1人の命など安い燃料だと思いませんか？」

「神様」

「そこまで・・・性根が腐っておったか、この愚孫めが！！」

持っていた杖を地面に叩き付けると同時に凄まじい衝撃波が前方に放出される。

＋ロキ＋

「そんなものでは僕は倒せませんよ？お・じ・い・さ・ま？」

足を踏みしめたと同時に同じような衝撃波が発生して神様の衝撃波を逆に吹き飛ばした。

＋神様＋

「ぐぬっ・・・！」

さっき言った通り神様自身の寿命を使って彼が統治している世界の寿命を長らえさせて

いるのでそれを怠って若い状態を維持しているロキには劣っていた。

＋さやか＋

「神様・・・！」

＋杏子＋

「大丈夫なのかよ・・・！？」

＋ロキ＋

「早く裏の２人を引き渡していただけますかね？それほど多くはないが燃料なのでね」

＋神様＋

「どこまでも・・・神の名を汚せば気が済むのだ！（我が息子も何をしておったか！）」

今の自分ではロキを倒すのは難しそうだ。しかしこちらにもまだ『奥の手』がある。

すでに転生をしてその世界において急成長を遂げ、特殊な力を数多く自分から授かった

て大いなる神に近い力を手に入れているはずの『カムイ』が。

＋神様＋

「（頼む、カムイ・・・！わしが抑えている間に早く来ておくれ・・・）」

・ ・ ・ ・

一方、カムイは神様からの連絡を受けて1人、神界への道を突き進んでいた。

＋神様＋

「（今、別世界の神を司っておる孫に襲われておる。助けにきてくれ、カムイ！）」

神様から大体の内容を聞いたカムイだったがまさか自分が知っているアニメの1つで

かなり終わりがいまだに納得がいかない『もう1つの魔法少女』の物語として前の世

界でも話題となった『魔法少女まどか マギカ』の『さやか』に『杏子』が現れてそ

して宇宙の寿命を延ばすための燃料にされそうだというのだ。

＋カムイ＋

「そのロキってのがあのふざけた世界を作ったってわけか。ただし

やおかねえ！」

何となくだがそれに出てくるインキュバーダーぶちのめし確定でムカつくがその大本を

作りやがったとなればまずはそれを叩き潰す必要性があるわけだ。

リリカルなのはの世界で多くの力を手に入れたカムイは口キ討伐へ突き進む。

＋ダオス＋

「デイスンダー！」

声が聞こえて振りかえってみるとなんとダオスが後ろから追走してきて隣に並ぶ。

＋カムイ＋

「お前！一体、何しにきたんだ？」

＋ダオス＋

「我もこの世界を統治する神に従う者、主の危機となれば向かうのは当然であるっ」

どうやらこの世界のダオスを神様は部下にしているらしいがどう考えても実力が上だろう。

＋ダオス＋

「だが1つ謝罪しておかなければならない事がある」

＋カムイ＋

「なに？」

するとさらに2つの光が現れてそれぞれ姿を現すとカムイは驚愕の声を上げる。

「カムイ」

「って！お前らまでついてきちゃったのかよ！？」

「はやて」

「カムイがいきなり出て行っちゃって探してたんやけどね！」

「なのは」

「そしたらヴィヴィオにお菓子のお返しを持ってきたダオスさんが来てカムイがここに

向かっているって聞いて自分も行くって言うから一緒についてきたんだ」

何と機動六課2大殲滅砲がそろい踏みに加えて時を駆ける魔王まで援軍に来てくれたのだ。

「カムイ」

「（これってゲームで言えば最強固定メンバーだよな・・・やってみてえ〜！）」

今はそんな事言ってる場合じゃないと頭をふって目の前に見えてきた入り口へ急ぐ。

「?????」

「（まって！わたしも皆のところへ連れて行って！）」

「カムイ」

「！」

しかし突如としてそんな声が聞こえたカムイはそこで停止する。

「なのは」

「カムイ、どうしたの？急がないといけないんでしょう？」

「ダオス」

「ディセNDER、さっきの声、お前も聞こえていたか？」

「はやて」

「声？そんなのうちは聞こえへんかったけど……、なのはちゃん、聞こえた？」

しかしなのはは首を振る。どうやら声が聞こえたのはカムイとダオスだけだったようだ。

「カムイ」

「（までよ……？さっきの声、どこかで……）」

姿は見えないが概念のような存在感だけは感じる。ディセNDERの力が使えるかもしれない。

そう思ったカムイは目を閉じて神経を集中させると自らの力を光として解き放つ。

「なのは」

「か、カムイ!？」

全員がその眩い光に包まれて目の前が真っ白になった。

・

＋カムイ＋

「ここは……。やっぱりか……。見たことがある風景だと思ったけど」

カムイには光を抜けて立っていた場所には覚えがあった、そこは『まどか マギカ』でヒロインの1人『曉美 ほむら』が最終回で立っていた地球を望む別の星の地表。
そしてさっき聞こえた声の主はこの景色のおかげで容易に想像する事が出来たのだ。

＋カムイ＋

「お前だろ？ 鹿目 まどか、いや……。今は女神・まどかつて言っただ方がいいか？」

すると目の前に桃色のロングヘアを白のリボンで飾りつけ、白のロングドレスをまとった少女、『まどか マギカ』メインヒロイン『鹿目 まどか』だった。

＋まどか＋

「よかった、あなたが気付いて。ディセクターなら概念を察知できると思ってた」

＋カムイ＋

「お前のいる世界の事はある程度、理解がある。確かお前が概念になる事で魔法少女を

利用してエネルギーを抽出する方法は消えたはずだろう？ 何故、また」

彼女の方法では別のエネルギーで補給は出来るモノの神であるロキからある程度は寿命を分け与えなければならぬのだがその多少の寿命の付与すらロキは拒否して概念となり手を加えられないまどかをしり目にまた時間を良いように改変してまた魔法少女達が宇宙の糧とされる世界に戻ってしまったという。しかもまどかの存在だけを消して。

＋カムイ＋

「さて……本格的にブ・チ・殺・し・確定ってわけだが……」

とりあえず怒りは抑えておいてまどかを見やる。

＋カムイ＋

「だが概念のままのお前じゃ戦えないだろう？何で俺を呼んだんだ」

＋まどか＋

「戦えなくてもせめて近くで2人が無事なのを確かめたい。それにロキに勝てるとすれ

ばあなたしかいない。ディセンドーは『無限の力を内包する者』、だからこそ神だと

固定概念しか持てないロキを超える力を持ちえると思ったから」

そんな彼女のまどかを見て少し考え始めるカムイだったがやがて顔を上げる。

＋カムイ＋

「まどか」

＋まどか＋

「えっ？」

＋カムイ＋

「どこぞの通りすがり風にいうとちょっとくすぐったいぞ？」

そういつて両手を翳してディセンドーの力を解放する。その力の意志は彼女との繋がり。

彼女が概念となっているなら存在出来る器に全部を移し替えてしまえばいい、つまりは

自分自身が彼女の憑代となる事で彼女自身を具現化させようというのだ。

＋まどか＋

「（温かい・・・これがディセンドーの光・・・全部を包み込んでくれるような・・・）」

光がやむとまどかは不思議な感覚になった。自分の中に別のもう一つの存在があつてそ

れと共に感覚を共有しているような今迄にない奮い立つような気持ち湧いてくる。

＋カムイ＋

「へえ・・・女神まどかの時の力ってかなりのものって聞いてたけど負ける気がしない

ってくらいに力が湧いてくるな・・・」

＋まどか＋

「皆を救えるんですね？わたし・・・もう見てるだけは嫌だから・・・

・！
」

＋カムイ＋

「んじゃ、行こうぜ？ふざけた未来にしゃがった馬鹿孫の幻想をぶち壊しによ」

そういつてまた元いた次元に戻ろうとしたカムイをまどかが止める。

＋まどか＋

「ロキはあれでも神の力を持っています。具現化したわたしの方が上ですが確実に倒す

ために最善の策をうっておきましょう」

まどかが祈りのポーズで眼を閉じるとカムイの身体が淡い光につまれて裏で純白の翼を広げたまどかに包まれると羽が散るエフェクトと共に彼の姿は変わっていた。

髪も前より少し伸びて背も高くなり、整っていた服も片方の袖が肩から大きく破れて全

体的に服もくたびれたような戦いでボロボロになったように裾や袖部分が変わり、白だったロングコートタイプの服も黒へと変化していた。

＋カムイ＋

「（これって・・・一護の修行後卅解状態に似てるな・・・）どうなったんだ？」

＋まどか＋

「あなたの持つ時間系列でもっとも強い状態に時間を進めたんです。わたしとのシンク

口が続いてる間はこの状態で戦えるようになりますから」

＋カムイ＋

「なるほどな。なんだか妙に心が落ち着いてるのも成長しちまったからか」

肉体の成長というのは精神の成長と比例すると聞いたことがあるが理解出来る気がする。

＋カムイ＋

「いくぜ、まどか」

＋まどか＋

「はい」

目の前に光のゲートが現れてそこへと向かう。

・ ・ ・ ・

＋なのは＋

「な、なに！？」

なのは達の真裏にまた光が発生してそこから何かが超高速で飛び出してあつという間に

見えなくなる。なのは達とダオスも突如の事に啞然とするしかなかった。

3人をもつてしてもさっきの速度はほとんど反応する事すらできなかったからだ。

†ダオス†

「さっきの気はかすかだがディセクターだ・・・、しかしあの速力は一体・・・!」

†はやて†

「カムイならはよ行こう、ダオスさん、なのはちゃん!」

†なのは・ダオス†

「うん」「うむ」

3人も全速力でカムイの後を追った。

・ ・ ・ ・

†ロキ†

「その老体でよくそこまで防ぎましたね。さすがは原初の神と呼ばれただけある」

ずっとロキの攻撃に耐えていた神様だったが老いには勝てずついに膝をついた。

†さやか†

「か、神様!?!」

†杏子†

「もついい!わたしがあいつのいう事聞けばいいだけだろ!?!」

†神様†

「ならぬ・・・！わしのミスとは言え転生して笑ってくれておる男がいる、そんなわしに礼を言ってくれた・・・この老い耄れに喜びを思い出させてくれおった。老い先短いわしじゃが主らの笑う顔を見たいんじゃ・・・！倒れるわけにはいかん」

まだ望みはある。カムイが間に合えば何とか形勢を逆転できるはずである。

＋ロキ＋

「面倒だな、さっさと死んでくださいよ、老い耄れがあああ！！」

そういつて手を翳した真上に巨大な焰と鉄塊が解け、凄まじい高温を放っている球体を呼び出してロキが不敵な笑みを浮べながら言い放つ。

＋ロキ＋

「あなたを滅ぼしてこの世界も僕が統治してあげますよ！僕の玩具としてねえええ！」

＋杏子＋

「神様！もう止めろ、わたしらをあいつに渡せよ！？」

＋神様＋

「ならぬ・・・！」

さやかはその場にへたり込んで両肩を自分で抱き抱えるようにして涙を流す。

「さやか」

「どうやってもわたしは幸せなんてなれないんだ……。結局、どこに行ったらどうし

たって夢も希望も……。正義の味方もないんだ……」

「ロキ」

「消えろ！！ヘルフレア！」

振り抜くと同時に巨大な日の塊が前方一帯を吹き飛ばして神の間が粉塵と爆風が吹き荒れる。

そしてロキからも確認できないがその顔には笑みが浮かび、笑い出した。

「ロキ」

「はっはっはっは、だから僕のいう事を聞けば良かったんだ、僕に従わないなら誰であ

ろうと殺しちゃえばいいのさ！あゝ……神を殺すのも楽しいな」

「????？」

「誰を殺すって？」

その声に振り返ると目の前には巨大な蒼い球体が反応も儘ならない速度で直撃する。

「ロキ」

「があああっ!？」

そのまま成す術無く吹き飛ばされて壁に激突し、地面を転がってすぐに前を確認した。

挿入曲【Bleach Number One (Rock Version)】

すると目の前には古びたロングコートのような服をきて少し乱雑に伸びた髪に長身が

目立つ男性が立っていてその後ろにはなんと神様やさやか達がいた。

＋ロキ＋

「ば・・馬鹿な・・！あの一瞬で3人を運んで気付かれずに攻撃したっていうのか」

＋カムイ＋

「大丈夫か、神様」

＋神様＋

「たくつ・・・遅すぎるわい。年寄にどんだけ働かせるんじゃ・・・

」

突然の事に驚いて呆然とするだけの杏子とさやか。気付いてみると爆音や轟音の直後

にロキの真裏にいてさらに目の前には長身の男性が立ってロキを吹き飛ばしていた。

＋カムイ＋

「さやか、杏子」

＋さやか＋

「えっ・・？」

＋杏子＋

「なんでわたしらの事を・・・？」

＋カムイ＋

「よく知ってるさ。まあ、理由は言えないんだけどな。さてと・・・

」

そういつてロキに向き直る。その顔は怒りに満ちていた。

それもそのはずである、こんな風に傷を負った事がない上に痛みも感じた事がない自分

が初めて傷に痛みをつけられた、ただの人間界の住人である。

＋ロキ＋

「お前・・・僕に傷を・・・痛い想いをさせてくれたな・・・殺す、八つ裂きにしてやる！？」

威圧的な魔力を放出するロキだったがさやか達にはその圧力はまったくかかっていない。

＋ロキ＋

「そんな・・・！僕の魔力圧に人間が平然と出来るわけ・・・！？」

＋カムイ＋

「おい、ロキ」

そういつて剣を振り抜くと同時に前方一帯を風塵が吹き抜けてそれで後退させられて魔

力の放出を邪魔されて想像しえなかった事態にどんどん焦りの顔になる。

＋カムイ＋

「始めようぜ・・・一瞬で」

剣を突きつける様に構えてロキに宣告を言い渡す。

†カムイ†

「終わらせてやる」

危機一髪の状態に合ったカムイ。

ロキに鉄槌を下し、さやか達を護れるのか？括目して待て。

4 少女達と神の孫と女神＋転生者〓無敵？（後書き）

ご意見、ご感想などお待ちしております！

〓今日の一言〓

エドガー・w・ハウ曰く

戦争なんかに行かなくなつて、ヒーローにはなれる。パイの数が足りない時に 僕はパイは好きじゃないんだ、って言えばいいのさ。

そしてわたしのコメントは錠剤のカプセルのようなもの。

5 最強と英雄と最高の親友

BGM【Bleach Number One (Rock Version)】

＋カムイ＋

「一瞬で終わらせてやる」

間一髪で間に合ったカムイはロキと対峙する。

＋ロキ＋

「覚悟はいいだろうねえ・・・？切り刻んでバラバラにしてミンチにしてあげるよ」

初めて傷と痛みをつけられたロキはすでにキレてしまったのか狂気に満ちた顔だった。

その身体からは途方もない魔力が放出されて刃にも圧縮されていた。

＋ロキ＋

「僕もここまで魔力を放出するのは初めてでね・・・ミンチ超えて塵になっても・・・」

そっいつてロキの姿が消えた。

カムイが目線でさらっとだけ確認するとまた前に視線を移した。

＋ロキ＋

「恨むなよ、下等な人間風情がああああ！！！！！！」

だがその斬撃を剣で防ぎきるが衝撃で大きく地面が砕け散る。

「さやか・杏子」

「きゃっ！？・うわ！？」

地割れが襲い掛かる前にカムイが神様達の前に立って剣で地割れを薙ぎ払った。

「カムイ」

「……場所を移そうぜ、ロキ」

「ロキ」

「なんだと？」

「カムイ」

「ここじゃ俺は戦いたくない」

だがこの言葉にロキが怒りにも失笑にも似た表情で叫ぶ。

「ロキ」

「何、寝言を言ってるんだい！その言葉は僕と対等な神だけが言える言葉、お前みたい

な低レベルの人間が言える言葉じゃない！今のは奇跡的に防いだだけなんだよ！！

安心しなよ、そいつらに被害が出るまでもなくお前なんか――

――

刹那、ロキの顔面は驚愕みにされてそのままステンドグラスを突き破ってロキが抵抗

するまもなく飛行し、神界の森林地帯へやってくるとそのまま地面に投げつける。
地割れと粉塵が舞上がってそこに片膝をついて驚愕と混乱に支配されたロキがひれ伏す。

＋ロキ＋

「そんな・・・この僕が・・・！？力だけで・・・！？」

そして目の前には凜とした表情で静かにロキを見つめるカムイが立つ。

＋ロキ＋

「なんだよ・・・その眼は・・・！ムカつくんだよ、僕を見下すみたいなその眼が！！」

掌中に圧縮した魔力弾を放つが軽々と避けられる。しかし着弾した後方で魔力の柱が
天空へと登り、凄まじい爆発音と衝撃波で暴風が吹き荒れる。

＋ロキ＋

「僕の力は地形ですら変えるんだ・・・。お前みたいなただ膂力だけとは違うんだよ！？」

すでにロキは彼が自らの膂力を人外のレベルにまで上げていると推測したらしい。

＋カムイ＋

「いつまで誰もいないところに叫んでるんだ？」

＋ロキ＋

「!？」

裏にさつきと同じように立つカムイが剣を一振りすると高速の一刀が放たれてそれが

ロキに直撃するが裏に多少後退したぐらいで致命傷ではないようだ。

「ロキ」

「こんなもんかい！こんな技じゃ、僕は倒せないよ!!」

だがカムイは表情を崩さずに言葉を続ける。

「カムイ」

「何を勘違いしてるんだ？今は『技』じゃない」

徐に掲げた剣に突如として膨大な気が収束していき、その波動が肌に突き刺さってくる。

「カムイ」

「ただの『剣圧』だ」

視線が交わった瞬間、ロキは低俗とののしった男から途方もないプレッシャーを受けた。

気が剣とぶつかり、上がった火が焰として燃え上がり剣を包み込む。そして本能的にまずいと感じた彼が回避しようとするが断罪の刃は振り下ろされた。

「カムイ」

「鳳吼破・真焰」

振り抜くと同時に白き焰の鳳凰が両翼を広げ、一羽ばたきしたと同

時に熱波による

衝撃波で大地が砕け、ロキへと咆哮を上げながら突進する。

＋ロキ＋

「ウオアアアアアアアアアアアアアア！！？アアアアアオオアア！？」

劫火の焰がロキの身体を焼き、鳳凰の突進をどうにか流して着地するがまだ終わらない。

＋カムイ＋

「舞い降りろ、朱雀衝撃波」

＋ロキ＋

「何をいつて……はっ……？」

気付くと自分を覆う様な巨大な影が現れて裏を振り向いた先にさらに驚愕する。そこには先ほどより巨大な焰の鳳凰が両翼を広げ、まさに襲い掛かるうとしていた。

＋ロキ＋

「馬鹿な——」

刹那、ロキの一带は鳳凰の翔来によって大地も溶かし、焼き尽くし、総てをその劫火の中に包み込んでカムイは裏を向き、言葉を吐いた。

＋カムイ＋

「お前も感じただろう、鳳凰の息吹を」

そして地面を蹴って飛翔すると神の宮殿へと一路、帰還した。

・ ・ ・ ・

十なのは十

「あつ、カムイが帰ってきたよ。おーい！カムイー！」

カムイが戻ってくるとすでになのは達が来ており、その周りにはロキの部下の兵達がズタボロにされた状態で転がっていた。

十はやて十

「なんや、いきなり襲ってきたんで撃退してしまっただけど、なのはちゃんはおちよ

いとやり過ぎちゃうか？SLB連発ってまさに鬼やん」

十なのは十

「はやてちゃんだってえげつない砲撃魔法連射してたじゃない、五十歩百歩だよ」

十ダオス十

「神の孫の兵と言うからどれほどかと思ったが他愛もない相手だったな」

十カムイ十

「（まあ・・・この3人相手じゃ神様クラスじゃなきゃ太刀打ちできるわけないわな）」

そして3人に助けられたさやかと杏子に歩み寄って片膝をついた。

＋カムイ＋

「大丈夫か、怪我・・・ねえか？」

＋さやか＋

「は、はい」

＋杏子＋

「なんともない・・・あの・・・あんがと」

＋カムイ＋

「気にするな、お前達の親友からの頼みだからな。俺もお前達を救いたいと思っただけ」

彼自身、彼女達の結末は何とも後味が悪かったのであんな未来は壊すと決めていたし、

それに加えて『親友』である仲間からも頼まれたとあつては動かざる得ない。

彼の言葉に疑問を浮べる2人、その『親友』という言葉が思いつかない様だ。

＋まどか＋

「さやかちゃん、杏子ちゃん、久しぶりだね」

カムイの裏から白い羽を広げてまどかが現れた。それを見て2人が驚きの声を上げる。

＋さやか＋

「まどか！？なんで!?!」

十杏子十

「おい、お前、まさか魔法少女になっちまったのかよ！」

そしてまどかはこれまでの事について話した。

あの後、ワルプルギスとの戦いで魔法少女になった事、その際に自分がこの世界、全て

の時間軸、宇宙から魔女を消し去るという願いを叶えて二度とそうならないための概念

に昇華した事、そして今回、ロキによってそれが崩されてしまいカムイに助けを求めた

事など今までであった事について2人や初めて会ったなのは達にも説明する。

十なのは十

「というより何でカムイ、前より背とか髪が長くなってるの？」

十まどか十

「ロキに確実に勝つためにカムイさんの時間軸でもっとも強い状態にわたしの力を使っ

て変身させたんです。だから背丈や髪が伸びたんです」

十はやて十

「でも今のカムイから魔力を全然感じへんよ？前は凄く強い魔力やっただのに」

十まどか十

「どんな方法で至ったかはわかりませんがたぶん、自分の魔力を自身の臂力に変換した

んだと思います。それは腕力であり脚力、握力であり踏力であり

走力、さきほどの戦

いでカムイさんの身体能力は飛躍的に伸びていましたから」

そのまどかの言葉に対してカムイが口を開こうとした時、裏の扉が
撃ち破られた。

「まどか・さやか・杏子・なのは・はやて」

「「「「「！」「」「」」

「ダオス」

「神よ、お下がりください。今のあなたは消衰しすぎている」

「神様」

「うむ・・・」

「カムイ」

「・・・・・・」

その煙の中から現れたのはロキだがその姿は狼型の獣人になってお
り咆哮を上げる。

「ロキ」

「僕をこんな醜い姿で戦わせる事を後悔させてやる！！全員、皆殺
しだあああ！？」

刹那、消えたロキ。

「まどか」

「（しまった！？今はシンクロが解けてカムイさんも弱体化してる、
今狙われたら）」

だがそう思ったまどかの予想に反して狙いは彼ではなかった。

「なのは」

「!？」

一瞬、気配を感じたなのはが裏を向こうとした瞬間、何かに首元を掴まれて気付いた
時には痛みと同時に壁に叩き付けられて目の前には獣人のロキがいて押え付けられる。

「ロキ」

「動くなよ？この女をスクラップにされなくなかったらな」

「はやて」

「なのはちゃん!!」

簡単に言えばこの時点でロキには死亡フラグが経ったというわけだ。

「カムイ」

「おい」

「ロキ」

「なんなんだ？その態度は？この女をバラバラにされたいのかい!!」

「なのは」

「ああああ!!？かはっ・・・ああ・・・!？」

あまりの力になのはが苦痛の叫びを上げた瞬間、カムイが消える。

「口キ」

「……っ！……？」

気付いた時には自分が壁に叩き込まれてそのまま後頭部を掴まれたまま逆方向の壁にまた叩き付けられる。

「なのは」

「あ……ああ……」

落ちそうになるなのはをカムイがしっかりと抱き抱えてゆっくりと地面に降した。

「カムイ」

「悪い、なのは。俺が早く反応していれば……」

「なのは」

「大丈夫……だよ、わたしは。それよりあの子達を……助けてあげてよ？カムイ」

無理に笑顔を作るのはを見て彼女をその場に寝かせてその前に立つ。

「カムイ」

「心配するな、すぐに終わらせる」

「なのは」

「……うん……」

「ロキ」

「この……！！！！いい加減に死ねっていつてんだろおおお！！！」

そういつて突進し、その爪をカムイ目がけて突き立ててくるロキ。その攻撃ははやて

や神様、ダオスですらどうにか反応出来るようなそれほどの速度だった『はず』だった。

だが避ける動作をするわけでもなく、ゆっくりと片手を前へ上げて意図も簡単に止める。

「ロキ」

「そんな……獣人化した僕の攻撃を……止めた……！？」

「カムイ」

「気付いてねえみたいだな。今のお前の力より俺の力の方が上だ」

するとロキだけに凄まじい圧力がかかりその場に腕を掴まれた状態で地にひれ伏す。

「ロキ」

「なんだ……！？魔力もないのに……何故、こんな圧力があ……！？」

「カムイ」

「俺は魔力なんざねえよ。俺の力は『霊力』、今感じてるのが『霊圧』だ」

「ロキ」

「なんだと……？」

この姿になつて彼はこの状態の時の記憶も蘇っていた。魔力の通じない相手に対して
俺は神に頼んで魔力を失う代わりに膂力を得てそれと同時に強大な
気に比例して新た
な『靈力』を得ていた。

さらにはさつき彼が一瞬で移動した歩行術は靈力を持つ際に参考にした彼の元いた世界でやっていたアニメ『BLEACH』の高速戦闘歩行術『瞬歩』と呼ばれる技なのだ。
そしてその力が強大なために自らの靈圧を感知する事が出来ないように自らの次元を
常人や神すらも超える次元に立つ事で他者は彼から何も感じなくな
った。

＋まどか＋

「わたしでも感知できないなんて・・・わたしより上の次元に立っているというの？」

＋カムイ＋

「まどか」

そういつてまどかを見て少し柔らかない笑みを浮べて言った。

＋カムイ＋

「少しだけ荒れるから皆を護っていてくれるか？今度はお前の手で2人を護れ」

裏のさやかと杏子を見て頷くとダオスや神様、はやても一緒に倒れているなのは元に

転移すると翼を展開して強力な結界を張って衝撃に備える。

＋ロキ＋

「こんな・・・！神たる僕が・・・こんな・・・人間なんかにい・・・
・！！？」

＋カムイ＋

「お前は人間を嘗め過ぎた。人は変わる、他者のために自分を変える事が出来るのが人間だ、だからこそ強くなれる。俺も只の人だったが護るために・・・」

BGM【火花散らして】

その剣に膨大な霊圧が収束されて収束しきれない霊圧が溢れだし尾を引く。さらにカム

イはこの状態になった事で可能になったディセンドラーの究極奥義『ミュートロギア・ド

ライブ』を発動して剣を逆手に持ち替えて振り被る。

＋カムイ＋

「強くなった・・・！」

眼光に射抜かれたロキは身動きもできずにその一撃を受ける。

＋ロキ＋

「・・・ま、まて――」

＋カムイ＋

「これが受け継がれた英雄の剣だ！斬！空！天、翔剣――！！

「！！！！」

強力な霊圧を纏った斬り上げから降りおろし、2連撃を与えた直後にそのまま真上に最大のエネルギーを纏ったまま斬り上げて天高くロキを吹き飛ばす。

「ロキ」

「があああつ！！？」

しかしまだ彼の攻撃は終わらない。

「カムイ」

「見せてやる・・・喰らえ！！てんじょうそうはざん天翔蒼破斬！！」

霊圧と闘気を集中させた剣をそのまま振り下ろしてロキを地面に叩き付けると同時に魔法陣が展開されてそのエネルギーの解放によってロキがまた上に打ち上げられる。

「ロキ」

「僕が・・・神の僕が・・・こんな・・・なんで・・・」

ロキが感じる初めての『恐怖』だった。今迄自分の思い通りにならない事が無かったというのに目の前の『只の人間が転生した』だけの男にまるで歯が立たなかった。

「カムイ」

「お前は多くの魔法少女達の命を散らせた、そして俺の仲間にも刃を向けた。俺は

お前を許さない・・・よく覚えておけ、それが恐怖だ、お前が今まで他者に与え続
けてきた感情だ・・・その恐怖を胸に抱いたまま・・・地獄に墮
ちろ！」

挿入歌【鐘をならして】

そういつてカムイは剣を手元で回すアクションをしながら自らの足
元に白き魔法陣と
身体の周りに羽を模した円陣を展開して詠唱を唱える。

＋カムイ＋

「瞬け！明星の光！うおおおおお！！！」

そういつて剣を天にかざすと光の螺旋と共に巨大な翼剣が現れ、そ
れを両手で構える。

＋カムイ＋

「喰らいやがれ！！！！天翔！！！！光翼剣！！！」

ロキに直撃すると同時に部屋一帯を眩い閃光が包み込んでロキの断
末魔が響き渡る。

＋ロキ＋

「うおおおおおおわあああああああ——
——」

この一撃でロキの身体は消滅し、その後には緑の宝玉が残ってそれ
が宙に舞い落ちた。

「カムイ†

「悪いな、世界で一番強いって信じてる奴らのためにも負けられないのさ」

「神様†

「ロキ・・・哀れな孫であつたは・・・」

そのロキの変り果てた宝玉の姿に憐れみを込めてつぶやく。

「カムイ†

「お前ら、大丈夫か？」

「はやて†

「うん、こつちは大丈夫やよ？ダオスさんとまどかちゃんが護ってくれてから」

まどかとダオスが歩み寄って言葉を交わす。

「ダオス†

「よもや神すらも圧倒する領域にまで上り詰めるとは。ディセンダーとは無限の器か」

だがこの言葉に首を振りながらなのは達を見る。

「カムイ†

「前の俺じゃダメだったろうけど今は護りたい大切なモノがある、だから負けないさ」

「さやか†

「カムイさん！」

十杏子十

「やったんだよな？」

十カムイ十

「ああ、もう大丈夫だ・・・つと。なあ、さやか」

そういつてさやかを見て笑みを浮かべながらこう言った。

十カムイ十

「世界も捨てたもんじゃないぜ？夢だつて希望だつて英雄^{ヒーロー}だつて望めば誰だつてなれ

るんだ、俺もそうだからな・・・でも今は本当に大切なモノつてのに気付けた」

言葉が続けるカムイはまどかの手と杏子の手を引き寄せてさやかの手に重ねる。

十カムイ十

「お前は見えてなかったんだ、本当にお前にとって護るべきモノがこんな近くにあつ

たつてのにな。今なら分かるだろ、こいつらはお前にとって・・・何だ？」

重なる手のぬくもりを感じながらまどかと杏子の顔を交互に見る。

2人共、魔女にな

った自分のためにずっと止めようとしてくれた、声を掛け続けてくれた、そして杏子

は自分と一緒にいる道を選んでまどかも自分を護ってくれた。

あんなに酷い事をしたのに2人はまだ自分を支えようと一緒にいよ

うとしてくれる。

十 さやか十

「2人は・・・わたしにとって、最・・・高の！親友です・・・！」

涙を浮かべながらそう言い切ったさやかがまどかと杏子に抱き着いた。まどかにはカム

イが自らの霊力で実体化させているので触れる事が出来る。

彼としてもこんな光景が望んでいた結末だった、魔法少女っていう夢のある存在だって

言うのならこんな夢や希望に溢れたストーリーになってもいいはずだと思うから。

十 杏子十

「ば、バカ！こっ恥ずかしい事言っじゃねえつつの！（照」

十 まどか十

「そういう杏子ちゃんだって笑い泣きしてるよ」

十 さやか十

「まどかだって・・・ていうか2人共、泣いてるのに笑ってて変な顔・・・」

そっいつて抱き合いながら久々の親友との時間を笑って共有するさやか達だった。

・ ・ ・ ・

挿入歌【ASAYAKE】

＋カムイ＋

「行くのか？」

＋まどか＋

「はい、ロキが消え、前のシステムはやがて消えるでしょうが魔法少女や魔女達が

消えるわけではありませんし・・・まだ存在を僅かでも手に入れた今なら多少な

りとも干渉をする事が出来ますから少しでも変えてみます」

まどかは元の世界へと戻って魔法少女達を見守り、少しでも希望を持てるように導くためにここでさやか達とは別れる事にした。

そしてロキの宝玉も彼女が浄化し、人としてもう一度、転生させると持っていた。

＋さやか・杏子＋

「まどか・・・」

心配そうにする2人を見てカムイは神様を見てこう頼んでみた。

＋カムイ＋

「なあ、神様。確か俺は別の世界にも飛べるんだったよな？」

＋神様＋

「うむ、その世界軸を見つける事が出来ればお前は自在に世界を渡る事が出来る」

＋カムイ＋

「なら・・・」

今度はまどかの方を向くと指を指してこう宣言した。

「カムイ」

「まどか・・・いつか俺が必ずお前の世界に行く。そしてお前も世界も魔法少女や魔

女も全て救い出してやる！」

「まどか」

「ええええっ！！？全てをって・・・そんな無茶な・・・！」

いきなりとんでもない事を言い出したカムイに驚愕の表情になるまどか。

「ダオス」

「全てを救い出すなど・・・ディセンドーよ、それはあまりにも強欲というものだ」

これにはダオスですら驚きを通り越してあきれたように言った。

「カムイ」

「我が儘かい？我が儘だよな、だが俺なら出来る。英雄に不可能はないってのは昔か

らの相場だろうよ、俺も英雄^{ヒーロー}ってヴィヴィオ達に言われちまってるからな。だった

ら俺は全てを助ける。誰一人、不幸にも絶望にも堕とさせねえさ」

「なのは」

「カムイって本当に言う事が想像の遙か上に行くよね・・・（笑」

「はやて」

「まあ、カムイらしい言ったらカムイらしいんやけどね」(笑)

そして自信に満ちた目でまどかに小指だけを差出して約束を交わす。

「まどか」

「ははっ・・・何だかこの約束の仕方は懐かしい・・・」指切り拳万々、嘘ついたら

針千本、のーます、指きつた！・・・約束ですよ？カムイさん」

「カムイ」

「ああ、約束だ。神様、出来るだけ早くまどかの世界軸見つけてくれよ」

「神様」

「ああ、わしの方でも全力を尽くそう」

元からディセンダーの力でこちらに呼寄せていたのだがそれも限界に近く、今の状態

ではカムイを自分の世界にまで連れて行く力はないのでこちらから彼女のいる世界を

見つけるしか手段はない。神様もまどかと固い約束を交わした。

「まどか」

「それじゃ行くね、さやかちゃん、杏子ちゃん・・・」

ゆつくりとまどかの姿が光と消えていく。さやかと杏子が彼女に叫んだ。

神様に頼んで『普通の女の子』に転生した2人は少しばかりの別れ

に想いを伝える。

「さやか」

「わたし達、ずっと親友だから！！離れててもまどかは最高の親友だからね！！」

「杏子」

「わたしもだぞ、まどか！！今度、美味しい菓子持って迎えにいつてやるからな！」

そんな親友2人、生前と変わらぬ誰もが惹きつけられる笑顔でしほの別れを告げる。

「まどか」

「うん・・・うん・・・！わたしも2人の親友だからね！忘れないでね！！」

刹那、まどかは光と共に消え、カムイの姿も元の状態に戻っていた。

「ダース」

「自分の世界に還ったのだな」

「カムイ」

「ああ」

するとカムイがその場に膝をついて突如として呼吸が乱れる。

「なのは・はやて」

「「カムイ！？」」

慌てて駆け寄る2人に支えられてどうにか立ち上がる。どうやらデ
イセNDERと

なった彼をもつてしてもまどかの力は身体に堪えたらしく、フラフ
ラだった。

＋カムイ＋

「おい、さやか、杏子、帰るぞ」

＋さやか＋

「へっ？」

＋杏子＋

「帰る？」

カムイの言葉が理解できない2人の頭の上には「？」マークが浮ん
でいる・・・ようだ。

＋カムイ＋

「お前らの面倒も俺が見てやるよ。俺の家に来るんだ、今日からそ
こがお前らの帰る

場所になるんだぞ？だから・・・家に帰る、一緒にな」

＋さやか・杏子＋

「・・・（啞然）」

＋カムイ＋

「分かったらさっさとついてこい、美味しい晩飯食わせてやる。行く
ぞ！」

そう言つて本来の屈託のない笑顔で2人を呼んだカムイを見て笑顔

を浮べて走り出した。

「さやか・杏子」

「はい!」「おっス!!」

こうしてロキの手からさやかと杏子を救い出したカムイ。

さやかと杏子の2人はもう一度、夢と希望のある新たな人生の一步を踏み出した。

そしていつか今度は親友や元の世界にいる仲間達と笑って同じように過ごす事が出来る

未来を願って・・・そしてカムイも必ず助けに行くとここで誓いを立てるのだった。

5 最強と英雄と最高の親友（後書き）

ご意見・ご感想などお待ちしております。

そして今日の一言はロバート・ゴダード曰く

何があり得ないかは、簡単に言えるものではない。

昨日の夢は、今日の希望になり、明日の現実になるから

そしてわたしのコメントはパイの実の層の一枚のようなもの。

6 交わした約束と新たな相棒と新たな危機

＋カムイ＋

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

カムイはその日、管理局のレイヤー建造物で作られた陸空戦演習場で修行をしていた。
それはというとまどかとの融合によって新たに彼に記憶された能力で只のパワーアップという名称だったのだが霊力が使えるようになるのを考えて名称をつけた。

＋カムイ＋

「卍・解！」

一護の卍解モーションを参考にしてパワーアップ技の名称にした。
もちろん能力としては原作同様でライトフェンサー時の5倍～10倍の戦闘能力を発揮できる。

まだ使いこなしていない分、出力が安定しないのが難点だが最低でも5倍の戦闘能力は発揮できるにまで修行でどうにかなっていた。

＋カムイ＋

シャルウルス・フェンサー
「全てを破壊する刃」

刹那、カムイの姿が消えて練習用に生成した敵機が一瞬で10機撃

破される。

「シャーリー」

「修行であるバンカイという技の稼働時間が3分に伸びましたね。本人は3分しか

とは言っているけれど……」

その修行を補佐しているのがフェイトの執務官補佐とメカニックをしている以前は六

課ロングアーチ部隊に所属していた『シャリオ・フィニーノ』愛称『シャーリー』だ。

「シャーリー」

「前回記録で3分間で300機を撃破。しかも被弾無し、十分な結果に思えるけどな」

彼は、3時間程、彼の戦闘訓練の手助けをしている。正解が解けてまた使える状態

になるまでライトフェンサー状態で戦い、可能になってからまた正解してどうにか

3分にまで伸びる様になってきたのだ。

「カムイ」

「正解は馬鹿デカイ霊圧を消費するのは知ってたが……こいつはかなりしんどいな」

正解したレディアントはかなり強力な能力を発揮はしたが力と動きを制御し、正解状

態を維持し続けるには膨大な霊力が必要になり、原作の隊長格でも長時間使用し続け

るのは難しく、靈力に目覚めたばかりのカムイでも3分間が最長稼働時間だった。

「シャーリー」

「それにD S A Aの公式LP測定タグのシステムを彼用に改造して使ってみたけど

ライトフェンサーの時点で元六課や他の子達を超える6000、しかも卍解状態で

は彼の説明通りに5倍の30000っていう途方もない数値だし」

しかも卍解した時点で修行後一護と同等の能力を有するため膂力・

靈圧と共に凄まじ

く靈圧を一点集中させる事で相手を圧殺する事も可能で見た目的にはテレキネシスの

ようにも見えるが生半可な威力ではない。

「カムイ」

「空裂閃」

かなり出の速い高密度に圧縮した靈圧の斬撃で次々に敵機を撃破していくがシャーリ

ーから見ると強靱的な膂力による速力と攻撃速度も相成ってどう攻撃しているのかは

映像を見ないと認識出来ない、卍解状態のカムイはまさに無敵である。

「シャーリー」

「そこまで！規定数の敵機を撃破、プログラムを終了します」

彼の身体の事も考えてシャーリーは規定数を撃破すると自動的にプ

ログラムを停止する
るように設定しており、彼に無茶をさせないように配慮しているのだ。

＋カムイ＋

「はぁ・・・はぁ・・・っ・・・！」

剣を支えにしてどうにか倒れ込む身体を支えるカムイ。転生して強い肉体を手に入れたとは言え、今までに体験した事のない身体への反動ダメージに動けなくなる。
急いでシャーリーが駆け寄って肩に手を回させると彼の杖代わりで補助をした。

＋シャーリー＋

「すぐにシャマルに治癒をお願いしますからもうちょっと頑張ってくださいね」

＋カムイ＋

「あぁ・・・これぐらいで倒れやしねえよ・・・まあ、辛い状況だけだよ」

基本的にこの設定も彼のメディカルチェックをしているシャマルが彼の希望と実際の身体への疲労や私生活への支障なども考慮して決めている。

＋シグナム＋

「カムイ！シャーリー！」

＋エリオ＋

「だ、大丈夫ですか！カムイさん！？」

＋カムイ＋

「エリオにシグナム？何でお前らがこんなところに」

そういうカムイを無視してシグナムとエリオが彼の両肩を支えてシヤリー^ヤリーの代わり
に一緒に歩き出した。

＋シグナム＋

「我らとの模擬戦でもこんな状態にならなかったお前がこの状態とは・・・」

＋カムイ＋

「修行だよ、修・行。俺に憧れてる奴らの英雄^{ヒーロー}で居続けるための修行^{修行}ってな」

StrikerS時点の模擬戦でも息は乱したがここまで酷い状態にはなっていなかったようだ。

＋エリオ＋

「修行って・・・どんな無茶したらこんな状態になるんです。やり過ぎですよ」

＋カムイ＋

「無茶もするさ・・・もう1つ、交わした約束のためにどうしても必要なんでな」

『交わした約束』、それはまどかと交わした必ず彼女の世界へ行って全てを救い出す

という事。彼もアニメを見て知っているが『まど マギ』はかなり
ダークな部分が多
い理想の脆さと現実を知らされるモノだったが自分には原作ブレ
イ
ク属性がある。

はつきり言ってディセクターの力を使えば魔女ですら浄化する事が
出来るだろうし、

ワルプルギスの夜という超ど級の魔女でも正解のさらに『先』の力
を使う事で世界を

構成している『円環の理』ですら破壊出来る。

その前段階のための訓練、まずは『正解』を完全に制しなければな
らなかった。

†シャーリー†

「理由を聞いてもこればかりで何なのかまでは話してくれないのよ、
カムイさん」

そう言うシャーリーの言葉を聞いてシグナムはカムイを横目で見る。
疲労はしていた

がその眼は力強く、覚悟とも信念とも取れる強い輝きをその眼に見
た。

†シグナム†

「この男がこうと決めたら誰も止められん。やらせておくしかない
が・・あまり無茶

をされて倒れられても困るのだぞ、テストロッサ達もそうだがお
前を慕う者達も心

配させる事になるのだからな、それは忘れるな、カムイ」

†カムイ†

「わくってるよ・・・、あいつらにカツコ悪いところは見せらんね

えしな」

カムイとして生きると決めたときから決めている根本的な理由、ヴィオにとって常に憧れで誇りに思える兄貴でいる事。だからこそ転生してぬるま湯に浸かっていた自分を自分で叩き直しているのだ。

†シグナム†

「それにもう1つ理由というのもある」

†カムイ†

「？」

†シグナム†

「お前に倒れられたら・・・その・・・何だ、仕事帰りの楽しみが減るではないか」

実は喫茶店 Vivid の常連中の常連は意外にシグナムで仕事帰りにはほとんど毎回来店しており、その度に和系のスイーツを美味しそうに食べているのだ。

†エリオ†

「（デザートを美味しそうに食べている女の子なシグナム副隊長・・・可愛いかも）」

何となく脳内イメージで作り上げたシグナムは女の子で可愛かった。

†シグナム†

「エリオ・・・貴様はそんなにレヴァンの鎧になりたいようだな・・・」

「エリオ」

「すいません、嘘です。これはちょっとした若気の至りなんです（ガクガク）」

それは肯定したも同然だぞと内心でツツコむカムイ。

「カムイ」

「まあ・・・マスターが倒れてちゃ、楽しみにしてる客に悪いわな・・・」

何となく嬉しくもあるカムイは笑みを浮かべながら2人に喫茶店まで運んでもらった。

・ ・ ・ ・

「ウエンディ」

「大丈夫ツスか、カムイ兄？はい、珈琲」

喫茶店に戻ると午後からの営業に備えてやってきていたウエンディが後を引き継いで

カムイの様子を見ていた。

シグナム達は予定していた模擬戦のためにまた戻り、後で来ると言う。

「カムイ」

「ああ、少し落ち着いたよ。にしてもフレンチトースト、美味しいの

作っ たな」

彼のために軽食でフレンチトーストを作り、珈琲と一緒に出したのだが好評だった。

＋ウエンディ＋

「伊達にカムイ兄の喫茶店でバイトしてないッス。へへっ、褒められちった〜」

素直に嬉しそうなウエンディ。彼女もカムイは兄のように慕っている。その彼に褒められたのが嬉しいらしくガッツポーズを決めている。

＋ウエンディ＋

「皆、カムイ兄が大好きなんスから無理し過ぎはダメッスよ〜？」

今度はウエンディが肩敲きとマッサージしてくれた。何となくだが気持ちがよく、しばらくは彼女にマッサージをもらって少し疲れがとれた気がした。

そして2階から降りてくる足音が聞こえてそっちを見ると少女が2人、現れる。

＋さやか＋

「ほら、杏子、早く来なさいよ。恥ずかしがってないで」

＋杏子＋

「つつつか・・・恥ずかしいつつの。なんだよ、このヒラヒラした制服は」

あれから2人は彼の喫茶店に住ませてそのまま喫茶店のウエイトレスで雇ってしま

ったのだが何気に2人の人気も良好でこの店のもう1つの名物でもあるウエイトレ

ス達のブロマイドの売り上げも2人は段々、良くなってきた。

＋ウエンディ＋

「前の夏服も可愛かったスけどこの第二弾の夏服もお気に入りで可愛いッス〜」

ちなみに制服のモデルは『P i a キャロット3』さやかの恋物語』で出てきた期間限

定の夏服でこれから夏期間の終わりまではこの制服で行く事にした。

＋?????・?????＋

「さやか〜!」「きょーこ〜!」

後ろから来たのは幼い竜のような青と白を基調とした生物と薄い黄緑色の丸い身体に葉っぱのような触覚が頭に一本ついている説明し難い生き物が飛び跳ねてくる。

＋さやか＋

「どうしたの〜、リーフモン?お手伝いしてくれるの?」

＋リーフモン＋

「うん、ボクがんばるよ!」

＋?????＋

「きょーこ〜!オレも頑張れるように応援するー!」

そういつて竜型の生き物が杏子の頭に飛び乗ってそのままだらんと
落ち着きだした。

十 杏子十

「応援はいいけど重いつつの！頭で落ち着くなよ、チビモン！」

この生物は『デジタルモンスター』略して『デジモン』。これもカ
ムイの転生前に子

供の頃よく見ていたアニメで今まで散々、絶望ばかりみてきた2人
に何か夢と希望の
あるモノをプレゼントしたいと考えた結果、神様に頼んで現出して
もらったのだ。

十 カムイ十

「すっかりパートナーデジモンとは仲良くなったみたいだな、2人
共」

十 さやか十

「はい！ワームモンの時も可愛いけどこの状態もちんまりしてて可
愛いわね♪」

そういつてリーフモンを抱き抱えるさやかに杏子の頭の上で落ち着
いているチビモン
をおろしてさやかのように抱き抱えてじゃれ合っている杏子とチビ
モン。

つまりは彼女達は確かに只の女の子に転生したが今現在は『選ばれ
し子供』へとラン
クアップしており、お馴染みの新型デジヴァイス『D-3』も所持
している。

＋カムイ＋

「よし、そんじゃ午後の営業始めるか。皆、頼むぞ」

＋さやか・杏子・ウエンディ＋

「「はい！」」「おう！」

＋チビモン・リーフモン＋

「「はぁーい！」」

・ ・ ・ ・

＋さやか＋

「ハンバーグセット、お刺身定食とお飲物の厳選抹茶です。ごゆっくりどうぞ」

＋杏子＋

「ケ、ケーキセットとロイヤルミルクティー、お、お持ちしました」

大体、慣れてきたさやかは持ち前の明るさと笑顔ですでにファンが出来ていて杏子の方もキャラに似合わない口調での接客が可愛さを演出したのかこれでファンになった客も多い。後は本当にマスコットキャラのデジモン達もいい具合である。

だがこれによって厨房がカムイ1人だと回らなくなってきたので厨房担当としてさらに従業員として雇ったのがTODのリリース・エルロンで腕はもちろんお墨付きだ。

＋リリス＋

「はい、オムライスのデミグラスソース掛けとおろしハンバーグ定食出来ましたよー！」

＋カムイ＋

「こっちのストサンとチョコサン、4番テーブル持ってってくれ、ウエンディ」

＋ウエンディ＋

「はいっスー」

何気にウエンディも人気がある。ちなみにプロマイドは全12種類あるのだが6位だ。

＋カムイ＋

「さやか、杏子、ちょっと表の掃除して来てくれ」

＋さやか・杏子＋

「はいー！」「うっス！」

＋チビモン・リーフモン＋

「オレもいくー！」「ボクも！」

それぞれ2人の頭の上に乗っかって外の掃除に向かった。

＋通行人・女性A＋

「あらまあ、今日も仲いいわね、杏子ちゃん、さやかちゃん」

＋さやか＋

「あつ、食堂のおばちゃん！こんにちわ〜！」

＋杏子＋

「こんちわ〜！」

最近ではこちらの街の人達とも交流が増えて仲良くなっていた。ここでもやはり一役かっていたのはチビモンとリーフモンの2体でマスコット効果は絶大である。

＋チビモン＋

「2人の手伝いするよ、リーフモン、進化だ〜！」

＋リーフモン＋

「うん！」

そついった2人がさやか達の頭から飛び上がると身体が光ってお馴染みの進化をする。

＋チビモン＋

＋ブイモン＋

「チビモン、進化ーーーー！」 「ブイモン！」

＋リーフモン＋

＋ワームモン＋

「リーフモン、進化ーーーー！」 「ワームモン！」

さつきより体も大きくなり恐竜っぽさが強くなったブイモンと芋虫型のタイプにな

ったワームモンに進化した2人はワームモンがちりとり担当、ブイモンはほうき担

当でさやかと杏子の2人をサポートする。

「ワームモン」

「はい、さやか。抑えてるから掃除、おわしちやおう」

「さやか」

「ありがと、ワームモン」

パートナーデジモンになった夜、さやかはワームモンに自分の過ちをありのまま話した。

今度は自分を偽らずに正直に自分の悪い面も彼に話したうえでそれでも自分のパートナー

ナーでいてくれるかと質問した。

その答えはそれでもさやかの『優しさ』を説いていつでも一緒に歩かせてほしいと彼

女のパートナーデジモンと選ばれし子供として絆を誓い合った。

「杏子」

「おっし！これで大体、ごみは集め終わってたかな」

「ブイモン」

「杏子、ゴミ袋もってきた！」

杏子もブイモンに自分の話をした。さやかとの戦いや最後、そして自分が魔法少女に

なった理由だとか、それを聞いたブイモンが言った言葉がこうだ。

だったら俺が杏子もさやかも今度は護る、杏子の夢も希望も全部まとめて！と本当に

子供のような事を真面目に宣言してきたのだ。猪突猛進だが誰よりも仲間想いな彼は

本心からそう思った。もう彼女達を泣かせない、いつも笑っていら

れる様にと誓ったのだ。

＋パスカ＋

「こんにちわ、さやか、杏子」

やってきたのはパスカ・カノンノ。今日は1人でやってきたよう
隣には彼女の相棒
でもある愛玩動物を思わせる白い体、短い手足、そして背中
の羽根が特徴的な

『モルモ』と呼ばれる生物でブイモン達ともすでに打ち解けている。

＋さやか＋

「今日も焼きりんご?（笑）」

＋パスカ＋

「うん、カムイの作る焼きりんごは絶品だから♪」

そういつて店に入ろうとしたパスカに裏から鋭利な蝶のような魔法
刃が飛来する。

＋モルモ＋

「カノンノ!」

＋パスカ＋

せんおうか
「旋桜花!」

即座に剣を引き抜いて桜色のオーラを纏った全身を使った回転斬り
で刃を叩き落とす。

＋?????＋

「おやおや、さすがにやるやない。テレジアのディセンダー」

目の前に現れたのは前髪で両目が隠れ、黒を基調としたゴスロリ服の女性が立っていた。

＋パスカ＋

「お前は・・・アウロラ!？」

＋アウロラ＋

「覚えてくれて嬉しいわ？ほんまにお久しぶりやね・・・」

笑ってはいるが一種の異様さを持つ彼女にさやかは後ずさり杏子が前に立塞がる。

＋パスカ＋

「お前はあの時に倒したはず・・・なんでここに・・・!」

＋アウロラ＋

「親切に教えにきたんどす。この世界にギルガリムが復活しましたえ?」

＋パスカ＋

「なんですつて!？」

『ギルガリム』・・・それは元々は世界樹によって統治された世界だったが崩壊の危機を迎えた際にその世界のディセンダーによって『蝕むモノ』という末端器官にされ他の世界をくらい続けていたのだがパスカ・カノンとその世界のテイルズキャラ

達の活躍により、その世界のディセンドーと共に滅びたという。

＋アウロラ＋

「末端器官はもう一つありましてな？それを培養してさらに増殖させたんですは」

＋パスカ＋

「まさかこの世界をギルガリムに？何のためにそんな事を・・・！」

＋アウロラ＋

「この世界の住人への復讐ですえ・・・前に話しましたな？」ある理由』でうちの世

界は滅びたと・・・その原因はこの世界にある管理局とかいう組織に根源のエネルギー

ギー体であるマナを奪われて世界樹が枯れ果てたのが原因なんや・・・！！」

管理局の上層部は新たなエネルギー源の開拓のために時空移動艦を使い、新たな世界

として見つけたアウロラの世界にあったマナを根こそぎ奪い取ってそれを持ち帰り、

兵器に転用していた。以前に存在だけ知られていた質量破壊兵器『アインヘリアル』

もこれを搭載したAMFなどの対魔力兵器を無効化するモノとして使われた。

＋パスカ＋

「そんな事が・・・」

＋アウロラ＋

「だからこそ今度はうちが奪つたる・・・この世界を人間、生きとし生けるモノ全てを

エネルギーに変えてうちの世界を蘇らせるんや」

そして後ろに現れたのは異形の巨体に禍々しい気を放つ獅子の身体だがカブトムシのような装甲を頭につけ蜘蛛のような多脚を持つ異種型の魔物が現れる。

「アウロラ」

「これは挨拶代わりですえ？ほな、またお会いしましょ。いけ、キメラビース」

こう言い残してアウロラは身体を回転させながら転移魔法でどこかへと消えて行った。

「キメラビース」

「ゴアアアアアアアアアアア」

「カムイ」

「何の騒ぎだ！」

騒ぎを聞きつけたカムイも外に出てみると状況を見て即座に判断した。

「パスカ」

「ごめん、カムイ！わたしのゴタゴタにこの世界を巻き込んでしまったみたい・・・！」

「カムイ」

「ゴタゴタなんざ、慣れっこだよ。それより被害が出る前に終わらせるぞ」

パスカとカムイの2人が前に出て戦闘体勢を取った。

「ワームモン」

「さやか、僕達もいこう！」

「さやか」

「な、何言ってるのよ！あんな怪物に小さいワームモンが勝てるわけないでしょ？」

「ブイモン」

「杏子、俺も戦う！」

「杏子」

「バカ！？相手見て言えっの、お前みたいなチビが勝てる相手じゃないだろ！」

また誰かを亡くしてしまったら？と頭をよぎる2人にとっては戦おうとしている二匹を止めるのが心理だ。

だがそれに対してワームモンとブイモンは2人を必死に鼓舞する。

「ワームモン」

「大丈夫、さやかが応援してくれば負けないよ。それに話してた友達の事を今度は

護りたいんでしょ？だったら僕もさやかも友達も護りたい！」

「ブイモン」

「俺やワームモンを信じてくれ、杏子！杏子が『勇氣』を出してくれたら俺は絶対に

負けない！どんな相手だって俺は絶対に勝って見せる！」

「さやか・杏子」

「ワームモン・…」 「ブイモン、お前・…」

その時、2人の持つD・3の画面が光り輝いてそれぞれの画面にアニメでの映像を思

い出して貰いたいのだがさやかには『優しさ』『愛情』『純真』『誠実』の紋章が写

し出されてその光がワームモンに放出されて光を放つ。

さらに杏子のD・3には『勇氣』『友情』『知識』『光』『希望』の紋章が映し出さ

れブイモンに同じく光が放出され、2体のデジモンがさらなる『進化』を遂げる。

「ブイモン」

「エクスブイモン」

「ブイモン、進化——！！」

「エクスブイモン！」

頭部が小さく、体型も人間に近くスマートで全体的にスタイリッシュなデザインに強

力な腕力と脚力をもっている幻竜型デジモン。腹部には「V」に2本の直線を書き足し

た「X」の文字が刻まれている成熟期デジモン『エクスブイモン』に進化した。

「ワームモン」

「スティングモン」

「ワームモン、進化——！！」

「スティングモン！」

人型のフォルムの昆虫型デジモン。昆虫独特の高い機動力と防御力を持ちながら、暗

殺者のごとき冷静さと知性を持っている成熟期デジモン『ステイングモン』に進化するとさやかと杏子の前に立ってキメラビースに対峙する。

＋エクスブイモン＋

「カムイ、ここは俺達にやらせてくれないか？」

＋カムイ＋

「エクスブイモン」

＋ステイングモン＋

「2人に見せたいんだ。自分達にも誰かを『護れる力と想い』があるって事に。親友

を護ると言ったださかの『想い』に応える『力』になりたい」

＋パスカ＋

「ステイングモン・・・」

2体の言葉を聞いたカムイは変身しようとしていたがやめるとパスカにも裏に下がるように言って後退すると2体に敵の相手をさせる事にした。

＋キメラビース＋

「ゴアアア！！ゴオオオオ！！」

咆哮を上げながらこちらに突進してくるキメラビースにエクスブイモンとステイングモンが応戦する。

† スティングモン †

「さやかもさやかの想いも俺が護る！」

† さやか †

「・・・っ！ スティングモン、頑張つて！ わたしも・・・あなたの『力』になるから！」

† 杏子 †

「分かつたよ！ お前を信じる、頼むぜ、相棒！」

† エクスバイモン †

「任せろ！」

エクスバイモン・スティングモン vs キメラピアスの対決が今、始まる。括目して待て。

6 交わした約束と新たな相棒と新たな危機（後書き）

ご意見・ご感想などいつでもお待ちしておりますよっほい（ノ、）

そして、今日の名言は松下 幸之助曰く、

命をかけるというほどの思いがあつて初めて、

いかなる困難にも対処していく力が湧い

てくる

そしてわたしのコメントはスプーン曲げで折れたスプーンのようなもの。

7 仲間と秘奥義祭と新たな戦い

†エクスブイモン†

「オオオオオオオオオオ!!」

上から飛来して踏みつけをくらわせ、ステイングモンがヒットアンドウェイ戦術で

四方八方から連続の攻撃をしかける。

†キメラビース†

「ゴアアア!!」【デモンズランス・発動】

エクスブイモンの足元に紫の魔法陣が現れて周りに闇の気を纏った剣が発生する。

†杏子†

「バックステップ!」

杏子がいち早く気付いて指示をだし、その通りにバックステップで攻撃を回避した。

†ステイングモン†

「スパイキング!」

肩の装甲部分が上がり、腕の籠手部分から紫色のスパイクをだし、突撃する。

†ステイングモン†
「フィニッシュー!!」

キメラビアスの横っ腹に直撃させて身体が揺らいだところにエクสบイモンもその剛腕を振り被って右ストレートを叩き込んで青天させる。そして真上に飛上って2体そろって間髪入れずに追撃をしかけた。

†エクสบイモン†
「エクス、レイザーー!!」

†ステイングモン†
「ムーンシューター!!」

腹部の「X」の紋章から強力なエネルギー光線を放ち、三日月上のエネルギー波を共に放ってそれがキメラビアスに直撃すると大きな粉塵が舞う。

†さやか†
「あたった・・・!!」

†杏子†
「やったか?」

だが瞬間的に反応したカムイが2人の前に出ると即座に変身する。

†カムイ†
「レディアント　メア　ロードフェンサー!!」

†ウエンディ†

「そうはさせないツスよ！エアリアルボード！」【Yes, Sir】

愛刀のライトフェンサーを構えて粉塵から飛び出してきた紫を含んだ閃光を叩き落とした。

さらにはデバイスとして再構築してあったエアリアルボードを盾形態にして防いだ。

「エクスブイモン」

「すまない、カムイ、ウエンディ」

「?????」

「見てもらえんな」

刹那、キメラビースの真後ろに人影が現れる。それは獣の骸骨をくりぬいて作った仮面に黒を基調とした服とマント、そして双剣を構えた青年が現れる。

それはTOD2の魔法剣士・ジューダスでスピリットブラスター状態になっていたのか

その身体には七色のオーラを纏ってその姿が瞬間的に消えた。

「ジューダス」

「千烈虚光閃！」

斬り上げから目にもとまらぬ連続突きを繰り出して秘奥義を発動する。

「ジューダス」

「切り刻む！遅い！魔神千裂衝！！！」

素早い身のこなしから四方八方からの斬撃の嵐に目前で止まり、強烈なエネルギーを

纏った斬り上げをくらわせて一気に怯ませる。さらに追撃が飛ぶ。

「?????」

「シグナムさん！前にやった連携技・ユニゾンアタックを見せてやるう！」

「シグナム」

「うむ！ゆくぞ、スタン！」

走ってきたのはシグナムと長い金髪の髪に白を基調とした鎧に特殊な意思を持った剣

ソーディアン・デイムロスを相棒に戦う魔法剣士、TOD2のスタン・エルロンだ。

「-【スタン】∞『シグナム』-」

【舞え！紅蓮の翼！】『焼き尽くせ！気高き焰！』

左右から焰を纏った双方の刃で流れるような斬撃を浴びせかけ、そのまま上に飛上る。

「- スタン∞シグナム -」

受けてみる！猛き我らの魂の焰翼！煉凰双翼閃！！
れんよく れんおうそうよくせん

上段から「X」の字を描くように振り抜いて焰の斬撃を飛ばし、それが次第に鳳凰の

姿を形どってキメラビースに多大なダメージを与える。

「エクスブイモン」

「み、皆・・・！」

＋アスベル＋

「全てを自分達で背負い込むな！」

＋ステイングモン＋

「アスベル、お前も助けに来てくれたのか」

＋アスベル＋

「仲間である2人の護るべきモノは俺達の護るべきモノでもある。だから2人でだなんて

言っな！さやかと杏子も俺達の仲間だ、なら、俺達も一緒に護ろう！」

＋ユーリ＋

「まあ、ヒーローとか柄じゃねえけど、やってやるしかねえだろ」

さらにユーリとアスベルもキメラビアスに走り、隙を一切あたえない連撃を加える。

＋アスベル＋

「終わらせてやる！」

＋ユーリ＋

「おしまいにしようぜ！」

まず先にユーリが仕掛ける。

＋ユーリ＋

「煌け 鮮烈なる刃！無辺の闇を鋭く斬り裂き！仇名す敵を微塵に

砕く！決まった！」

滑るような高速移動から四方八方から凄まじい剣撃の嵐を浴びせかけ、剣閃だけが視界

に認識出来るほどの速度で連撃を重ね、斬りぬけると同時に最大威力の連斬撃が炸裂してキメラビアスが仰け反る。

「ナユリナユリ
「せんごうえいじん漸毅狼影陣！」

アスベルがさらに追撃する。

「ナスベルナスベル
「遠慮はしない！決めてやる！！」

連続の体術から強烈な前蹴りで仰け反ったキメラビアスをさらに仰け反らせた。

「ナスベルナスベル
「こいつと俺の距離を離してくれ！ブイモン、ワームモン！」

「さやか・杏子」
「エクスブイモンエクスブイモン！エクスレイザーエクスレイザー！」
「スティングモンスティングモン、スパイキングスパイキングフィニッシュ！」

すぐさまさやかと杏子の2人が2体に指示を出してすぐさま攻撃してアスベルとの距

離を離すと加速出来る範囲が出来たのを見て一気に加速した。

空気をきり、最大加速のまま持てるすべての力を注いだ最速の抜刀

術を繰り出す。

＋アスベル＋

「斬空刃！無塵衝！！」
ざんくうじん むえいしょう

無数の剣閃が貫いてキメラビアスの身体は今までの猛攻でボロボロになってきていた。

＋ジューダス＋

「お前達だけで解決できる問題などしれている。子供は大人を頼ればいいんだ」

＋スタン＋

「俺達、仲間だろ？だったら何でも言ってくれ、水臭いぞ、さやか、杏子！」

＋アスベル＋

「そしてこの世界は俺達が護るべきモノ、それに仇名すならこの剣で断ちきるだけだ」

＋ユーリ＋

「まあ、肩ひじ張らずに頼るときは頼れってこった。」

さやか達の前にテイルズ主人公勢が護るように立塞がってキメラビアスに相対する。

＋カムイ＋

「お前らはもう1人ぼっちじゃない。共に戦う、俺達の仲間だって事だ」

「さやか」

「仲間・・・わたし達も皆の・・・仲間？」

さやかも杏子もすでに1人ではない。カムイやなのは達、リリカル世界やユーリ達の
テイルズ世界と数多くの繋がり、絆が自然と出来ていた。

「ユーリ」

「義を持つて事を成せ、有事あれば駆けつける。それが俺らの鉄則なんでね」

彼らが駆け付けた理由は簡単だ、仲間の有事にかけつける、それで理由は十分だった。

「キメラビウス」

「ガアアアアアアア！！！！」【暴走状態】【デモンズランス】

突如としてキメラビウスの身体が赤くなり、暴れはじめて手当たり次第に闇の槍を乱射してカムイ達に猛攻をしかける。

すぐさま距離を置いた彼らだが飛び上がりながらプレスをしかけたり、闇の槍の乱射などをなりふり構わずやってくるので逆に隙が見当たらなかった。

「?????」

「カムイ！」

「カムイ」

「って、なんつういいタイミングで来てくれたんだー？セルシウス！」

現れたのはTOEに出てきた精霊のセルシウス。彼女はカムイが習得したある技を使うために必要な秘奥義発動条件の1つだ。

＋カムイ・セルシウス＋

「容赦はしない！」「はあああああ！」

まずカムイとセルシウスが同時にOVL・4を発動してセルシウスが通常、人間の姿を取っているがこの技のために自然界の精霊に近い状態に変換する。

＋カムイ＋

「後はまどかを受け入れた要領でセルシウスを“纏”えば」

この技の参考にしたのは“ぬらりひよんの孫”でリクオが使っていた技、仲間の妖怪の畏を纏って2つの能力を行使できるものだがその精霊版のようなものだ。

畏は無いので波長を合わせるために同じレベルのOVLを使い、精霊になった彼女を

デイスンダーの力で自分と武器に憑依させて新たな力を生み出す能力で原作の方では

“鬼纏^{まとい}”だがテイルズっぽく改名して“ソウル・レゾネンス”という。

＋・【カムイ】∞「セルシウス」・＋

「古の蒼氷 今解き放つ！」【仇名す者を静謐なる無へ還せ！】

吹雪が旋風となり、2人を包み込み、冷氣と蒼いオーラに包まれて

髪もセルシウスの

ように長い青髪に薄い水色に濃い青で彩色された羽織に白の袴と上着、そして手には

透明度の高い水で出来た刃を持つ槍を構えたカムイが現れる。

† カムイ∞セルシウス - †
ソウル・レゾネンス！アフソリユート・レイナ絶氷の女王！

† シグナム †

「カムイとセルシウスが合体した・・・！ユニゾンのようなものか」

† ユーリ †

「相変わらず何でもアリな奴・・・（呆）」

† カムイ・【セルシウス】 †

「ヒーローはいつだって想像の上を行くもんだろ？」【あなたは何でもあり過ぎよ】

考えてみるとすでにカムイは、マイソロ・ブリーチ・ぬらりひょんの孫と多種多彩な

作品から能力を得ており、まさに何でもありな能力持ちだった。

† カムイ・【セルシウス】 †

「つつてもこれは結構しんどいし、さっさと決めるぞ」【ええ、いくわよ】

† キメラビース【暴走】 †

「ゴアッ！！ゴアアアア！！！」【デモンズランス乱射】

またデモンズランスを乱射してくるが笑みを浮べて手を翳した。

＋【セルシウス】・カムイ＋

【カムイ、続いて！ダイヤモンドダスト！】「おう！月牙……」

セルシウスが能力を解放して彼の背後から化身のように現れて手を翳すと周囲を

包み込むように猛烈な氷結波が吹き荒れて出現した闇の槍すら凍りつかせた。

＋杏子＋

「マジかよ！？魔法まで凍らせやがった！」

＋カムイ＋

「天衝！！！」

刃から蒼い高密度の霊圧を斬撃として放出し、凍りつかせた魔法ごと吹き飛ばす。

＋【セルシウス】・カムイ＋

【足止めするわ】「OK！そっちも続けて頼むぜ」【ええ！】

セルシウスがキメラピアスの足全てを氷漬けにして動きを封じ、そこへ走る。

＋アスベル＋

「セルシウスさんの能力を使いながらカムイ自身の力も行使出来るのか」

＋ジューダス＋

「感覚を共有しているお陰で隙なく攻撃を畳み掛けられるようだな、

僕達も援護だ」

足を凍らされて動きを封じられたキメラビースにカムイ達の猛攻が襲い掛かった。

＋カムイ・【セルシウス】＋

ちりさめめ

あきさめめ

こがはさん

もうこれんげきは

「散沙雨！秋沙雨！虎牙連斬！猛虎連撃破！」

【アイスニードル！フリーズランス！】

怒涛の連続突きを叩き込み、流れるような動きと猛虎の如き、空中の連撃を放つ。

さらにそれに合わせて化身のセルシウスが氷の槍を間髪入れずに連携として叩き込む。

＋ジューダス＋

「プリズムフラッシュャー！」

＋スタン＋

「フレイムドライブ！」

＋アスベル＋

まじんけん

「魔神剣！」

＋ユーリ＋

「絶、風！」

＋カノンノ＋

「バーンストライク！」

＋シグナム＋

「飛竜一閃！」
ひりゅういっせん

↑ウエンディ↑

「エアリアルショット！」【Ok! Aerial Shot ready】

↑杏子・エクスブイモン↑

「ブイモン！ぶっ放せ！！」「エクス！レイザー！！」

↑さやか・ステイングモン↑

「ステイングモン、お願い！」「スパイキング！フィニッシュ！！」

間髪入れずにジューダス達の援護射撃が降り注いでキメラビアスの動きを完全に封じる。

そこにカムイとセルシウスが極限にまでシンクロ率を高めたソウル・レゾネンス状

態で発動出来る奥義【オーバードライブ技（OVD）】を発動する。

↑カムイ・【セルシウス】 - ↑

【わたしの魂をあなたの刃に！】「まとうぜ、セルシウス！」

化身のセルシウスがカムイの武器に吸収されて閃光と共にその姿を巨大な槍へと姿を変

えた。その槍は氷の女神を模した装飾が施されてカムイの周囲が凍結し始めた。

↑カムイ・セルシウス - ↑

凍てつけ 氷結の槍！その刃 刹那に汝の命を絶つ！

刃を地面に突き刺して氷の棘を迫出させてキメラビースを貫き、冷気を纏った気の刃を揮ってさらに滅多斬りにして一気に懐に入り込んだが瞬間、姿が消える。

それと同時にキメラビースを貫くように鋭い閃光が走って真裏にカムイが現れる。

「アスベル」

「っ！見てみる、キメラビースが！」

見た目は変わっていないように思えるのだがその身体が青白く変わりよく見ると表面が氷で覆われて次第に罅割れ始め、カムイとセルシウスが宣告を下す。

「 - カムイ・セルシウス -
散れ、氷光閃華ひょうこうせんか」

刹那、キメラビースは粉々に砕け散り、その欠片が花びらのように舞い落ちた。

「カムイ・【セルシウス】」
「どうにか完成形にもってこれたな」「ええ、出力も安定してたわね」

元々はこの技は出漁の安定しないカムイの正解を安定した出力で使うために考えたもので通常の彼自身の正解能力・臂力と戦闘速力の過剰強化は無くなるのだがその分、憑依させた相手の能力や固有の技を扱えて通常のカムイを大き

く上回る戦闘能

力を安定した出力で使う事が出来るようになっていた。

「ウエンディ」

「よっしゃー！やったッス、カムイ兄」

全員が駆け寄って勝利を喜び合う。

「カムイ」

「ああ。けどさすがに反動は来るな……」

「セルシウス」

「通常、精霊を纏うだけでもかなり難しい事なのよ？それを技や武器に転用するよう

な大技を使っただんですもの。シャーリーも組織でこれを開発しようと思っただけなら恐ら

くは数年単位の期間が必要って言わせた代物なのだから」

「スタン」

「カムイだから出来たって事だよな！やっぱすごいな！ディセンダーって」

そしてカムイはカノンにさっきのアウロラという女性について話を聞いた。

魔科学と呼ばれる技術を扱う科学者で彼女も元は別世界のディセンダーだったらしい

のだが話にあったように以前の管理局の上層部によって自分の世界のマナを根こそぎ

奪われて今回の事件を起こしたという事らしい。

「アスベル」

「彼女もディセクターだったのなら自分の世界の危機に現れたんだろっか」

「ジューダス」

「だが管理局に世界を滅ぼされ、それがこの世界そのものへの憎しみに変わったんだ

ろっ。いくらディセクターと言え、感情が無いわけではない」

アウロラも生まれた時は世界を護りたいと思っていた筈だろうがそれも絶望や悲しみに支配され、いつしか輝ける光器【ディセクター】ではいられなくなっただろうだ。

「ユーリ」

「たくっ、いつもこいつも管理局ってのは心底、腐ってやがるってか・・・」

「カノン」

「ユーリ・・・そんな言い方は・・・!」

シグナムに悪そうに見ながら言及するカノンだったがシグナムが苦笑しながら言った。

「シグナム」

「気にするな、管理局の腐敗は我らが一番、分かっている。真実だ、何も言えん」

だがこれにはユーリが真意が伝わっていないと思ったのか補足する。

「ユーリ」

「勘違いすんな、お前やなのは達を言ってるじゃねえよ。上の馬鹿共を言ってるんだ」

「アスベル」

「今はフレン隊長やリチャード、ヨードル陛下のお陰で腐敗も消えてはいるが・・・」

それでもまだ根強く残っているのも長い歴史が残ってしまった負の遺産のようだ。

「カノン」

「でもだからってこの世界を渡せない。大切なモノがたくさんある大好きなこの場所を」

理由はどうかたって護らないと・・・！」

「ウエンディ」

「大丈夫ツスよー！なんたってうちにはカムイ兄がいるんだし、ねっ？カムイ兄」

「ジューダス」

「だがさっきのモンスター、この人数でやっとな。カムイの新技があるってどうにか倒したレベルだ。油断は出来ない」

そういつて全員がカムイに視線を移す。それに気づいたカムイは不敵な笑みを浮かべな

から剣を肩に担いで振り向きながらはつきり言い切った。

「カムイ」

「そうでもねえさ、要するに俺が無敵でいりゃいい話だろ」

何の問題もないと言う風にさりとそんな事を言い出した。
転生して初めて本気になった、本気で強くなりたいと思って今迄ずっと修練を続けて
『想う』だけじゃなくそのための『力』も本気で鍛えてきたのはそのためだ。

＋カムイ＋

「それに世界一強い兄貴が負けちゃ駄目だろ？」

一番はそのきっかけをくれた子の言葉『世界で一番強い誇りに思える人』、本当の意
味でそんな兄貴になりたいから強くなれる、それが彼の強さでもある。

＋カムイ＋

「それにさやかと杏子の世界と親友達も助けに行かなきゃならねえからな、だろ？」

＋さやか＋

「カムイさん・・・」

＋杏子＋

「なんか、カッコいいぞ、アニキ」

＋カムイ＋

「だがお前らにも頑張ってもらっぜ？俺も一緒に戦ってくれる奴がいれば心強いしな。」

頼りにしてるぜ、2人の相棒達よ？」

そういつてエクスブイモンの身体を拳でこついてにやりと笑みを浮べた。そして2体

の身体が光ってブイモンとワームモンに退化する。

†ブイモン†

「俺・・・もつと強くなる・・・！頑張るからな、杏子」

ブイモンが拳を掲げて杏子を見つめる。杏子も笑いながら拳を突き合わせた。

†ワームモン†

「僕もさやかを護れるように今よりもつと強くなりたい」

そう言つて強い眼を向けるワームモンを抱え上げてしっかりと抱きしめ優しく撫でる。

†さやか†

「ありがと・・・ありがとね、ワームモン」

†アスベル†

「どうやら2人の事は彼らに任せれば大丈夫なようだね」

†ユーリ†

「だがこつからが本番だろ？あいつの話じゃ、こいつは序の口だろ
うよ」

†シグナム†

「また戦いが始まるな」

ミッドチルダに訪れた新たな危機。世界の護り手・ディセンドーとしてカムイと破壊者となった嘗てのディセンドー・アウロラ、相對する2人が出会った。

新たな力と共に決意と覚悟を決めたカムイの新たな戦いの火蓋は切って落されたのだった。

7 仲間と秘奥義祭と新たな戦い（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

そして今日の名言〜フロイト曰く〜

力は、あなたの弱さの中から生まれるのです。

そしてわたしのコメントは肉まんについているシートのようなもの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8782w/>

神様の凡ミスで転生した男～バラ色？灰色？人生再スタート！～

2011年11月13日23時01分発行